



特別展

発掘された国府

東海道・東山道の国府を掘る。



鈴鹿市考古博物館
Suzuka Municipal Museum of Archaeology

はじめに

古代、国毎に置かれた地方の役所である国府^{こくふ}は、各地に「国府」や「府中」などの地名として残っています。国分寺跡には地名だけでなく、基壇や礎石が残存するものがあるなど所在が確かめられ、国の史跡に指定されているものも多くある一方で、国府は地上に痕跡を留めるものが少なく、その中心施設である国庁^{こくちやう}の探求さえも困難が伴います。近年では、国庁の調査例が相次ぎ、政庁の構造が確認された国は、伊賀・伊勢・三河・近江・美濃・下野・陸奥・出羽・美作・因幡・伯耆^{こくちやう}・出雲・豊前・筑後・肥前・肥後・日向の17例となりました。

伊勢国府跡＝長者屋敷遺跡では、平成4年から範囲確認のための学術調査が始まり、平成5年には早くも遺跡南辺部で政庁の確認が行われ、以後、国府に関する建物が数多く検出されています。平成14年3月19日には矢下^{やおろし}（政庁）・南野・長塚地区の合わせて約73,940㎡が国史跡に指定されました。国府関連としては、特別史跡の多賀城跡附寺跡、史跡の秋田城跡^{きのわさくあと}、城輪柵跡^{やしろし}、下野国庁跡、近江国庁跡附惣山遺跡^{そうやま}・青江遺跡、因幡国庁跡、伯耆国庁跡附法華寺畑遺跡^{ほっけじばた}、出雲国府跡、周防国衙跡、筑後国府跡、肥前国庁跡に次ぐ10ヶ国目にして11例目の指定です。

史跡指定という節目の時期に際し、今回の展示では近年新展開のあった常陸・三河・伊勢・伊賀・近江・美濃・などを含む古代東海道・東山道地域に範囲を絞って、各地における国府調査の成果を紹介します。



伊勢国府跡 全景

国府の仕組みと役割

中央から国府に派遣された国司は、郡司の監督や政治・税務・軍事・警察・司法などを担っていました。国司には守・介・掾・目の四等官と史生がありました。四等官は毎日出勤する長上官で、守は長官、介は次官、掾は事務の統制を、目は記録・文案の検討を掌りました。史生は当番日のみ勤務する番上官で、書記を担当する下級官人です。その他の国衙職員として国師（僧尼・寺院の監督官。のちに講師と改称）・国博士・国医師、国衙の必需品生産や雑務に携わる徭丁など多くの人々がその任にあたっていました。国の等級によって派遣される国司の位階は異なり、介以下の国司をはじめ、国衙の職員定数も国の等級によって異なっていました。大国の場合、守は従五位上が相当し、国衙職員は約 800 人であったとされます。

国府の最も中心的な施設は政庁あるいは国庁と呼ばれ、築地塀や掘立柱塀などの遮蔽施設に囲まれた格式の高い場所です。整然とした掘立柱建物や瓦葺礎石建物からなり、シンメトリックな平面形態を有し、南面するのが一般的です。正殿を中心として東西には南北に長い脇殿が配され、正殿の前後には前殿や後殿が設けられることがあります。正殿あるいは前殿の南面には前庭があります。このような建物配置は平城宮など宮城における諸曹司や朝堂院をモデルとしたものと思われます。こうした共通の特徴が認められる一方、国庁には全く同一規格の例がありません。非常によく似た建物構成をとる近江と伊勢でも規模が異なります。国庁には、同一場所で建替えられ、長期に亘って存続する場合と一時期のみで他所への移転が考えられる場合があります。

国庁では、属官・郡司や軍毅を率いて行われた元日拝賀や月毎の行政報告である郡司告朔などの儀式が行われ、儀式に引き続いて饗宴も催されました。木簡の出土から政務の場であった場合も想定されています。

国庁の周辺には、実務的な官衙である曹司などが配され、国衙域が形成されます。それらの占地のあり方により、諸曹司が国庁を中心に溝や築地塀などに囲まれて整然と配置される宮城型と外郭施設を持たず、曹司が国庁の周辺に独立・分置さ

国司の定員

	大国	上国	中国	下国
守	1	1	1	1
介	1	1	0	0
掾	大掾	1	1	0
	小掾			
目	大目	1	1	1
	小目			
史生	3	3	3	3

職員令による

れる散在型に分けられます。宮城型としては伯耆や近江が、散在型としては下野や肥前があげられます。

国府に設けられた曹司のうち、その性格が考古学的に特定できるものとしては工房や厨家があります。工房では、国衙で使用する庁用物品や武器などの製作が行われていました。調査例としては、連房式竪穴遺構や鍛冶工房が検出された鹿の子C遺跡（茨城県石岡市）などが著名です。

厨家は、国衙での給食や食材調達を行った曹司です。郡衙にも同様の施設があるので、国府の厨家の場合は国厨家ということもあります。遺構の上でははっきりしませんが、下野・美濃・伊賀国府跡や相模国府関連の稲荷前A遺跡、遠江国府関連の御殿・二之宮遺跡などから「国厨」「厨」などと書かれた墨書土器が出土しています。国府所在地以外でも同様の墨書土器が知られることがあり、国厨家に出先機関があったことも想定されます。

その他に国府関連の施設として館や正倉があります。中央から派遣された国司の宿舎は国司館と呼ばれ、宿舎であると同時に饗宴の場でもありました。万葉集には、国司館における饗宴の席で詠まれた歌が載っています。国司館ではその他に政務が行われたり、穎稻（穂付きのイネ）を貸し付けて利息を得る出挙や国司に俸禄として与えられた公廩田（のちに職分田に改称）に関わる事務も行われたと考えられています。千葉県市川市須和田遺跡で見つかった「博士館」の土器墨書は、国博士の館に関わるものと見られます。

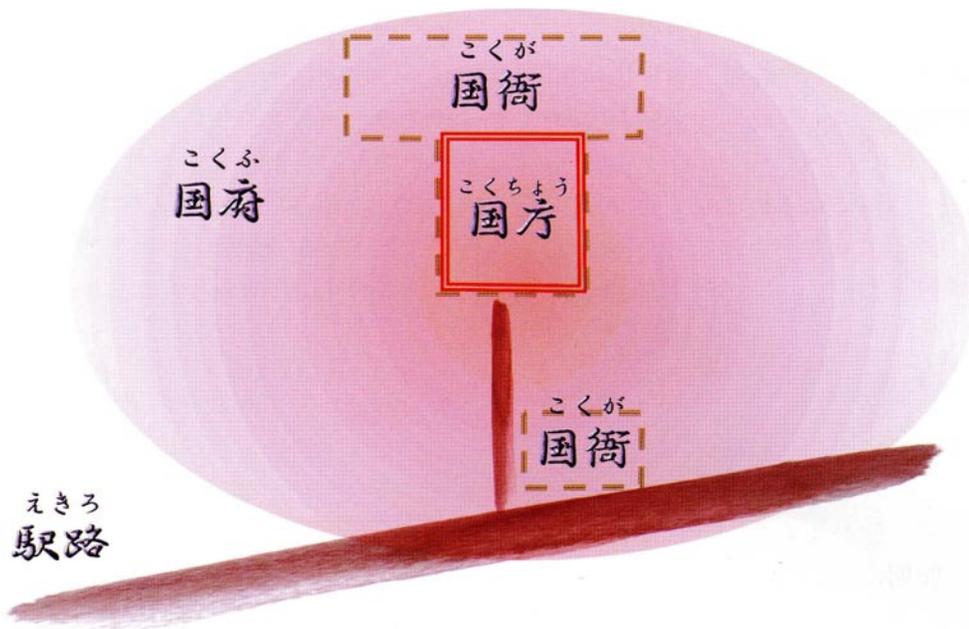
正倉は、租税や出挙利稲を保管する倉で、郡衙ぐんがの発掘調査例から一般に郡毎に設けられたと考えられます。国府でも倉庫が見つかることがあるため、国府に設けられる場合があったのかもしれませんが。

国衙遺跡の成立には、2段階が考えられており、第二の画期である8世紀前半から半ばに安定した展開を見せます。したがって郡衙遺跡の成立とは時期的にずれがあり、律令国家の地方支配の拠点としてまず重視されたのは正倉が設けられた郡（評）衙であったと考えられます。国衙こくぎが創設されていない段階において国司（国宰）は、郡（評）衙を拠点に政務を執っていたものと考えられています。

国府は、国庁や曹司・館あるいは道路などが計画的に配され、国衙職員をはじめ国府に関わる商

工業者等多くの人々の生活拠点でした。墨書土器や木簡、硯かたい、銚すい、施釉陶器といった国府から出土する官衙遺跡特有の遺物には、物質的にも精神的にも都の文化を感じさせるものがあります。国府が農村からどの程度独立していたかは別にしても、農村とは明らかに異なる都市的景観を有していたものと思われます。

かつては、平城京や平安京を縮小したような市街地を有し、方八町の領域があったとする国府観が支配的でしたが、その実態は、発掘調査によって少しずつ明らかにされ、地域の実情や歴史的背景によって多様であったことがうかがえます。必ずしも一定の面的な閉鎖空間をなすものではなく、国庁や道路を中心に面的に、かつときには線的に展開するのが国府の実態であったと考えられています。



国府・国衙・国庁模式図

東海道・東山道の国府を掘る

常陸国 — 茨城県石岡市常陸国衙跡・鹿の子C遺跡

東海道北端の国です。国府推定地は『和名類聚抄』の記載どおり茨城郡内とされ、3箇所の説がありました。それらの説のひとつである「城中山説」は現石岡小学校付近とするもので、その提唱者である豊崎卓氏によって昭和45（1970）年に同地の調査が行われました。校舎建設に伴う短期間のトレンチ調査で、掘方1.5m四方のものを含む柱穴が多数検出され、炭化物や焼土を含む層が上下2層にわたって確認されました。この付近では礎石や8・9世紀の瓦類が出土しており、以後常陸国衙跡として最も注目されることとなりました。

常陸国衙跡の本格的な発掘調査となった平成10・11（1998・1999）年の調査は、学校施設建設に先立ち、国衙遺構の確認を目的とするもので、遺構の地下保存を前提に実施されたものでした。石岡小学校敷地内に設けられた3箇所の調査区から官衙関連の掘立柱建物・掘立柱塀・築地塀の痕跡・区画溝などが見つかりました。

西区から見つかった掘立柱建物は廂を持つ大型の東西棟建物で、のちの調査で東西33m以上になることが確かめられました。同一場所での建替が

認められます。この建物の規模と構造から国庁関連の殿舎である可能性も探られています。南区から見つかった掘立柱建物・掘立柱塀・築地塀の痕跡・溝には4期の変遷が認められました。建物配置が大きく変わるB期とC期の間には大きな画期が考えられています。茨城郡衙や初期常陸国衙の政庁である可能性も今後の調査で検証されていくでしょう。北区からは東西溝2条と南北溝1条が検出されました。国分寺創建よりも古い瓦ばかりが出土していることから、初期の瓦葺建物が付近にあったことはほぼ確実とされています。

常陸国衙跡の北約1.5kmに位置する鹿の子C遺跡からは約200棟の竪穴建物のほか、鍛冶遺構・連房式竪穴遺構・掘立柱建物などが多数見つかっています。時期は8世紀後葉から9世紀前半までで、鉄製品や漆関連遺物が見つかっています。常陸国衙付属工房と考えられ、鉄製品や皮革製品が生産されていたと見られます。『続日本紀』によると延暦9（790）年条に「勅爲征蝦夷。仰下諸國令造革甲二千領。東海道駿河以東。東山道信濃以東」とあり、蝦夷征討に関わるものと考えられます。



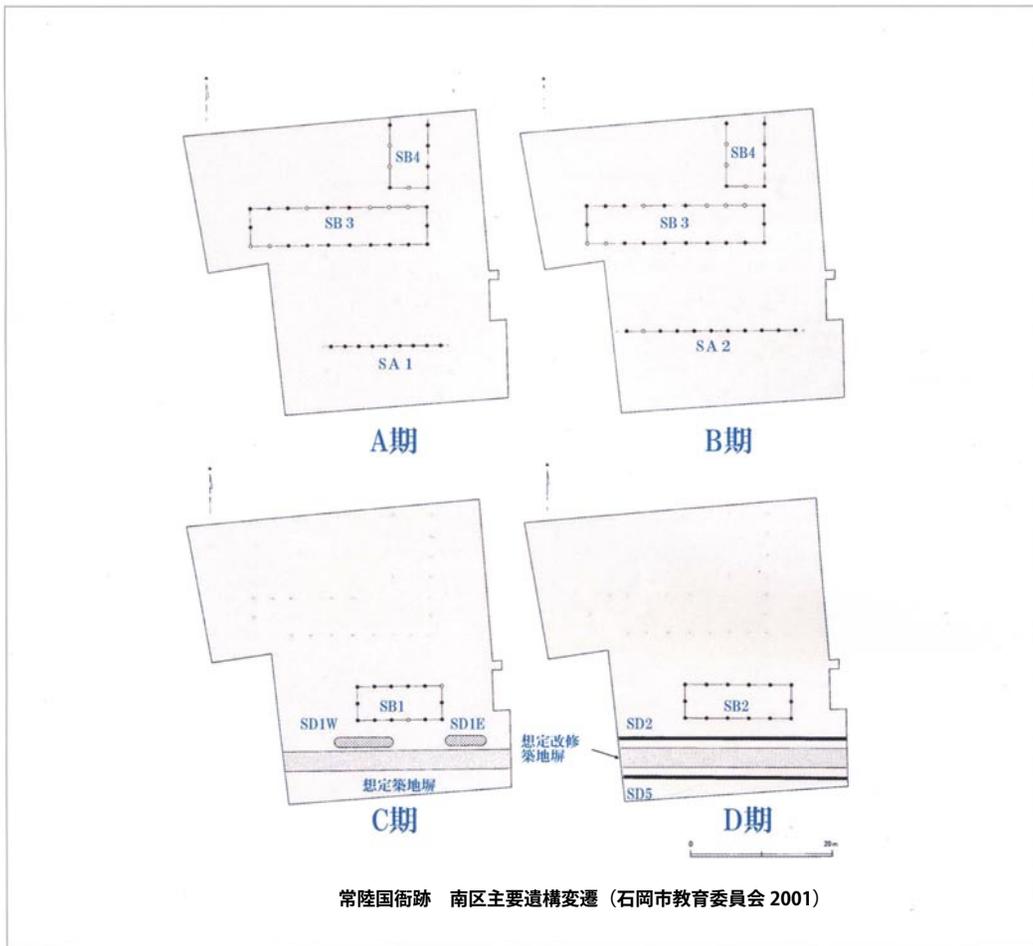
常陸国衙跡 北区全景 石岡市教育委員会提供



常陸国衙跡 南区全景 石岡市教育委員会提供



常陸国衙跡 西区全景 石岡市教育委員会提供



常陸国衙跡 南区主要遺構変遷 (石岡市教育委員会 2001)



鹿の子C遺跡 工房群 (財) 茨城県教育財団提供

常陸国 — 茨城県石岡市常陸国衛跡・鹿の子C遺跡

下総国府の所在地は江戸川左岸の国府台に推定されています。近在には下総国分寺跡・同尼寺跡がある国分台や須和田遺跡がある須和田台が隣接し、『万葉集』に詠まれた手児奈伝説の「真間の入江」推定地も付近に位置します。

和洋学園の国府台キャンパス内では3次に互って国府台遺跡の調査が実施され、国衛関連の遺構が検出されています。検出された奈良・平安時代の遺構には、掘立柱建物・竪穴建物・道路跡などがあり、4期の変遷が考えられています。

I期の遺構には両側側溝SD2・SD3を伴う道路SF1があります。幅は心線で7m、内法6mです。約180mに互って直線的に敷設され、北端は、東側側溝SD2を失って東へ鋭角的に曲がります。8世紀前半代のもと考えられ、8世紀中葉には廃絶するようです。この道路は国衛造営開始の端緒をなすものと見られます。

II期を代表する遺構は、L字状に折れ曲がる溝SD11で、狭くとも約70m四方の区画を構成するものと思われます。L字状部分は、区画の北西隅で、その内側には平行して板塀の痕跡と思われる柱列が確認されています。8世紀後半代の年代が考えられ、この時期には国衛が機能していたようで、区画の内外には掘立柱建物や長大な竪穴建物、鍛冶工房などがあります。「国」や「葛」の墨書土器が出土しています。

III期には南北180mに及ぶ区画を構成すると思われる南北溝が検出されています。時期は9世紀代で、溝に沿って硬化面が検出されていることから、人々の往来があったことがわかります。II期のL字状の溝は踏襲されず、国衛施設の大規模な再整備があったことが指摘されています。

IV期は10世紀代で、3期の溝が廃絶した後、竪穴建物が広がります。刀子・鏃・鉄鉗・毛抜きなどの鉄製品が出土していることから、一般集落ではなく、やはり国衛関連の施設と考えられています。

国厨については今のところ確認されていませんが、国衛遺構が広がると考えられる国府台に所在するものと思われます。「博士館」と記された墨書土器が見つかった須和田台や「国厨」の墨書土器が出土した国分台にも国衛や国府関連施設が広がっていたことが推測されています。



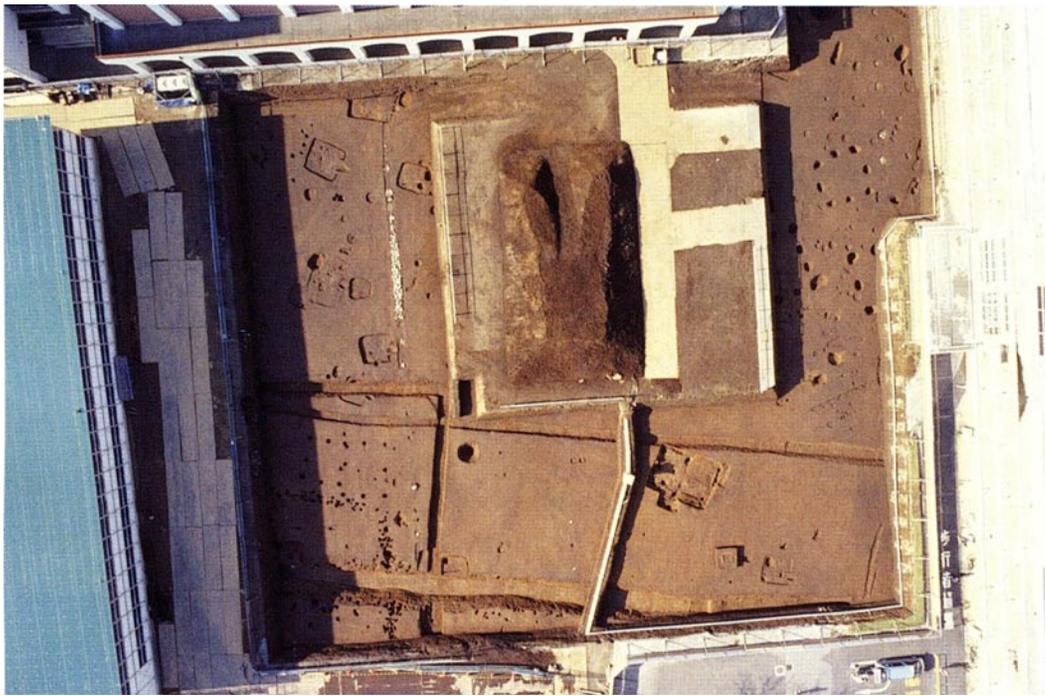
国府台遺跡 第1次調査 SB1・SB2 和洋学園校地埋蔵文化財調査室提供



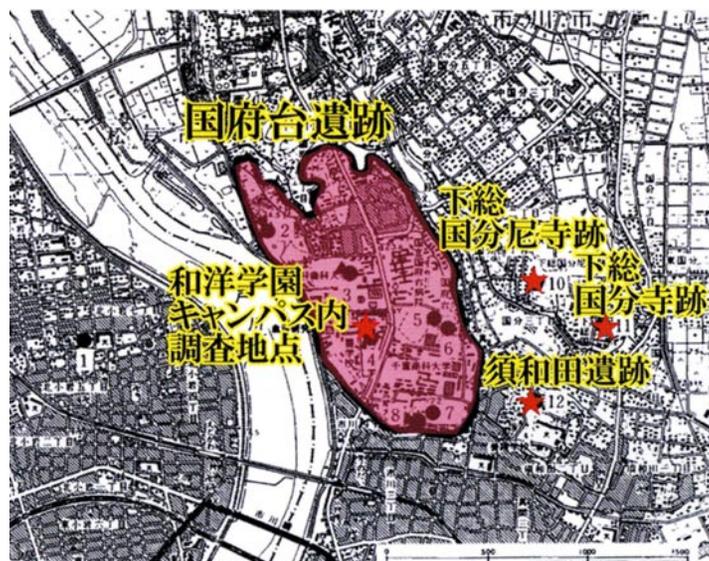
国府台遺跡 第1次調査区全景 和洋学園校地埋蔵文化財調査室提供



国府台遺跡 第2次調査区A・B地点
和洋学園校地埋蔵文化財調査室提供



国府台遺跡 第2次調査区C地点 和洋学園校地埋蔵文化財調査室提供



国府台遺跡 調査区位置図 (駒見 1999)

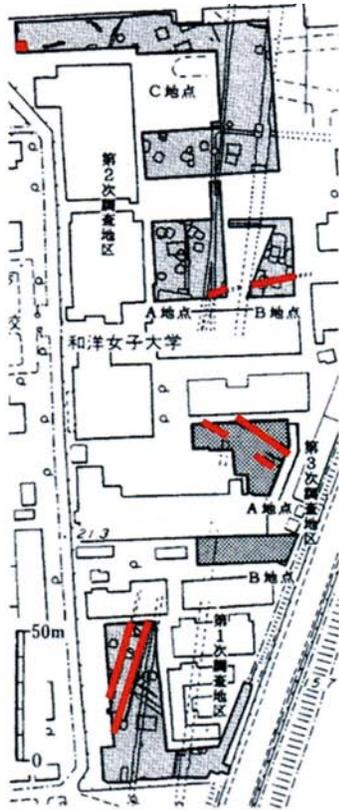


下総国分寺跡「国厨」墨書 市立市川考古博物館提供

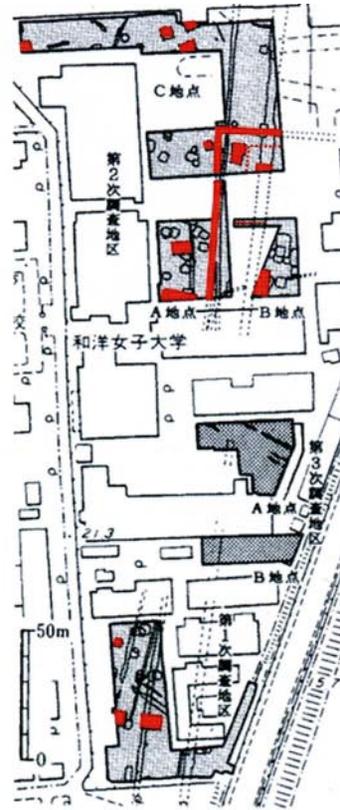


須和田遺跡「博士館」墨書(レプリカ) 市立市川考古博物館提供

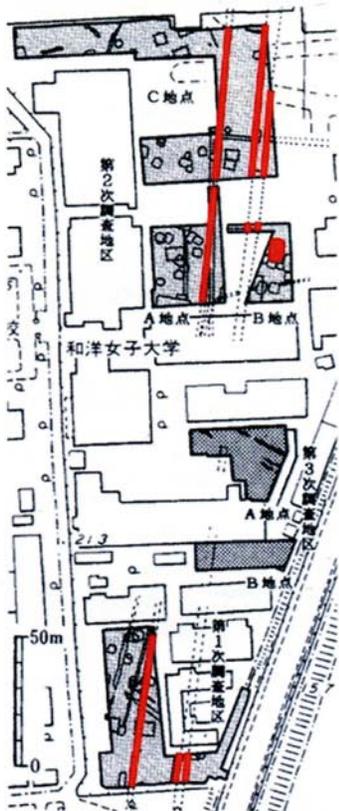
I期 (8世紀前半)



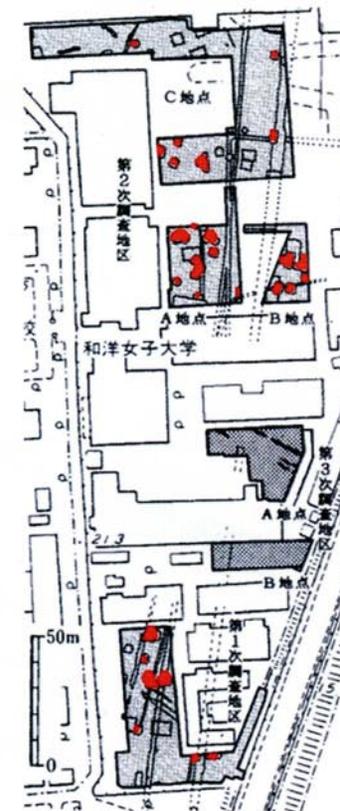
II期 (8世紀中葉
~9世紀初頭)



III期 (9世紀代)



IV期 (10世紀代)

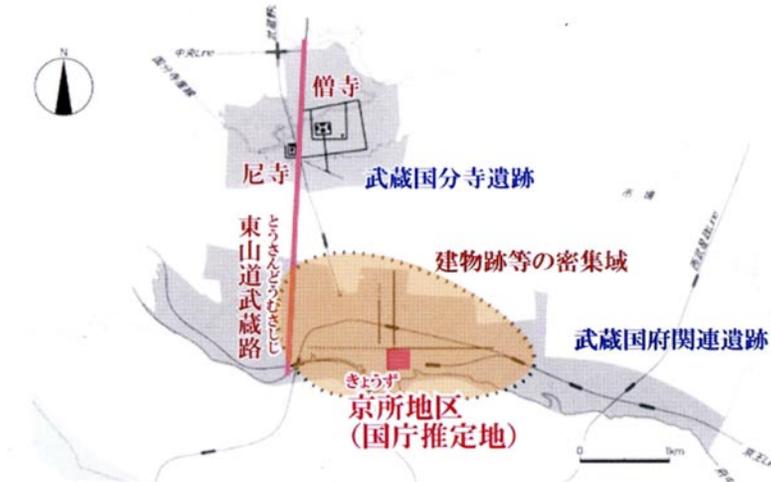


国府台遺跡 遺構変遷図 (駒見 1999)

武蔵国 —— 東京都府中市武蔵国府関連遺跡

武蔵国は元々東山道に属していた国で、宝亀2(771)年東海道に所属替えとなりました。武蔵国府は、多摩川左岸の立川段丘上に立地し、武蔵国府関連遺跡として20年以上調査が続けられています。

国府域の推定範囲は東西約2.2km・南北約1.2kmに及び、国庁は未発見ながら、国衙は国府関連遺跡のほぼ中央に位置する京所地区に所在することが確認されています。



武蔵国府関連遺跡 全体図 (府中市郷土の森博物館 2001)



武蔵国府関連遺跡 大型井戸 府中市教育委員会提供



武蔵国府関連遺跡 京所地区の掘立柱建物 府中市教育委員会提供

国衙が所在するのは京所地区の西半部分で、溝に囲まれた南北 230 m・東西 150 m以上の区画が確認され、総柱の建物や大型の掘立柱建物、礎石建物が検出されています。この区画の北西部分は溝が2重になっており、築地塀などの遮蔽施設の存在が考えられています。溝の途切れた部分からは門が見つかり、区画の北では東西道路跡が確認されています。礎石建物の周辺からは瓦や郡名のスタンプが押された磚（古代のレンガ）が多く出土しており、格式の高い建物であったことが推定されています。未発見の国庁もこの区画内のどこかに想定されます。



武蔵国府関連遺跡 京所地区の掘込地形 府中市教育委員会提供



武蔵国府関連遺跡 社の跡 府中市教育委員会提供



武蔵国府関連遺跡 軒丸瓦 府中市教育委員会提供



武蔵国府関連遺跡 「豊」押印磚 府中市教育委員会提供

一方京所地区の東半は、礎石建物の基礎部分である掘込地形が検出されているものの、やや様相が異なり、「多寺」や「□磨寺」など寺院名が押された瓦が出土しています。郡名を冠した多摩寺やさらには近在に多摩郡衙が存在するのではないかと推定もなされています。

京所地区以外においても溝で囲まれた施設が明らかになっています。国衙の南西における沖積地では大規模な掘立柱建物や建物を取り囲む溝が検出され、「大館」と書かれた墨書土器が出土しています。国守の館である可能性が高いと考えられています。その他に国司館の存在を示すものとしては、「大目館」の墨書土器が国衙の北方から出土しています。

国衙の北西からは、周囲に2重の溝を廻らせた

掘立柱建物が見つかりました。曹司や館としては類例のない構造をしており、社跡と推定されます。付近からは「神」の墨書土器も出土しており、国衙の北西すなわち戌亥の方角を守る社であったのではないかと考えられています。

その他にも溝で囲まれた区画が数箇所見つかっており、何らかの公的な施設が散在する様子が伺えます。国府関連遺跡内から発見された約2000棟の竪穴建物の分布や道路跡からは、国府関連集落の時期的変遷や国府の景観が考察されており、国府域内に発展段階の異なる小地域がいくつか認められることがわかってきました。国衙付属の工房についても曹司同様、散在する傾向にあるようです。



武蔵国府関連遺跡 「国」墨書 府中市教育委員会提供



武蔵国府関連遺跡 緑釉稜皿 府中市教育委員会提供



武蔵国府関連遺跡 「大目館」墨書 府中市教育委員会提供



武蔵国府関連遺跡 鍍金銅鏝 府中市教育委員会提供

相模国——^{いなり} 神奈川県平塚市稲荷前 A・^{かまへのうち} 構之内遺跡他

相模国府の所在地は、10世紀成立の『和名類聚抄』に大住郡とあり、鎌倉時代増補の十卷本『伊呂波字類抄』に余綾郡とあることから平安末期における移転が考えられ、さらに相模国分寺が所在する高座郡に初期国府を想定して、高座（海老名市）—大住（平塚市）—余綾（大磯町）の国府三遷説がありました。

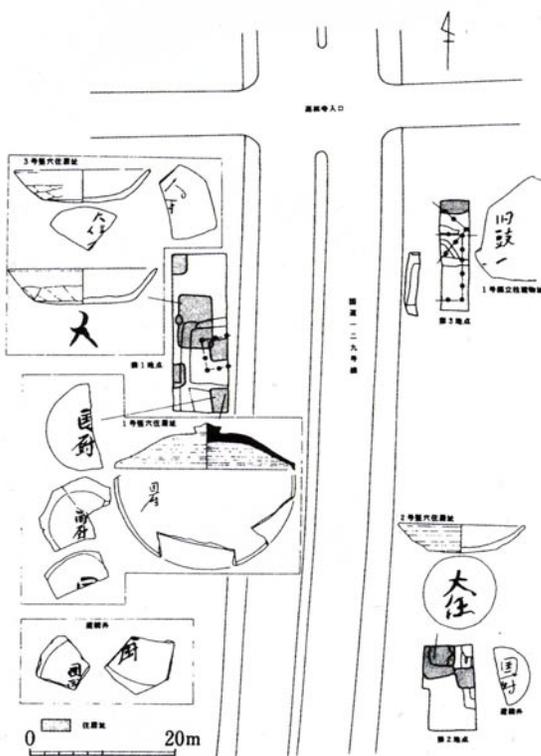
平塚市四之宮地区に想定される国府推定地は相模川右岸の砂丘ないしは砂州上に位置します。稲荷前 A 遺跡をはじめとする推定域内の発掘調査によって官衙関連の遺物や遺構が豊富に見出され、最近では当初から大住郡に国府が設けられ、律令

期の国府は一貫して当地にあったとする説が注目されるようになりました。

国府が見つかっていない相模国府跡において、最も注目されるのは「国厨」の墨書土器が6点出土した稲荷前 A 遺跡です。土器の時期は8世紀第3四半期のものです。その他、「大住」や「旧鼓一」と書かれた墨書土器が出土しています。鼓とは、大豆から造られた調味料とされるもので、『延喜式』などから武蔵・相模の特産物であったことが知られています。「旧鼓一」は、国衙において食材の調達や給食を掌る国厨と整合的で、興味深い資料です。「大住」の墨書は郡衙所属であることを示すも



相模国府跡 推定大住国府域の範囲 (明石 1999)



稲荷前 A 遺跡 調査区配置図 (明石 1999)



稲荷前 A 遺跡 第1地点 平塚市教育委員会提供



構之内遺跡 古代東海道 平塚市教育委員会提供

ので、国厨の活動に郡厨の動員があったことを思わせませす。

相模国府では、鍛冶工房関連の遺跡も確認されています。神明久保遺跡からは銅銚・銅製火熨斗・銅製錠前牡金具などの金属製品や多量の鉄滓・銅滓が出土しています。坪ノ内遺跡では、連房式鍛冶工房が検出され、鍛冶関連の遺物が多量に出土しました。坪ノ内遺跡の工房は8世紀末から9世紀初頭のものと考えられ、常陸の鹿の子C遺跡と同様、対蝦夷政策に関わるものと見られています。

国府推定地の中央に位置する構之内遺跡からは、幅9mの道路跡が検出されています。8世紀前半に敷設され、10世紀前後の廃絶が考えられています。その規模や構造から駅路東海道であると推定されています。

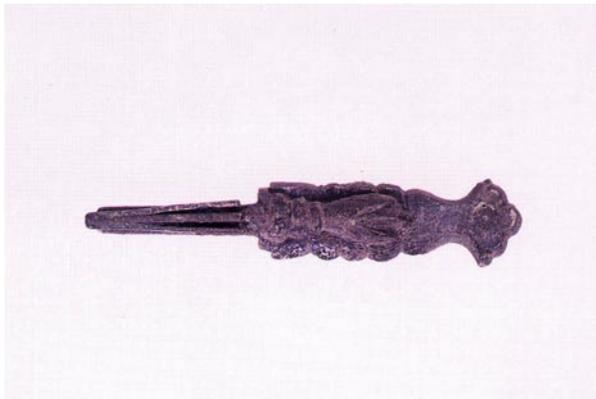
国庁や国衙中枢部の確認は今後の課題とされていますが、墨書土器・施釉陶器・銚帯・錠前・銅印など官衙特有の豊富な遺物が見られることや竪穴建物が約900棟、掘立柱建物が150棟以上見つかっていることから、この地に安定して国府が営まれたことは間違いないようです。1



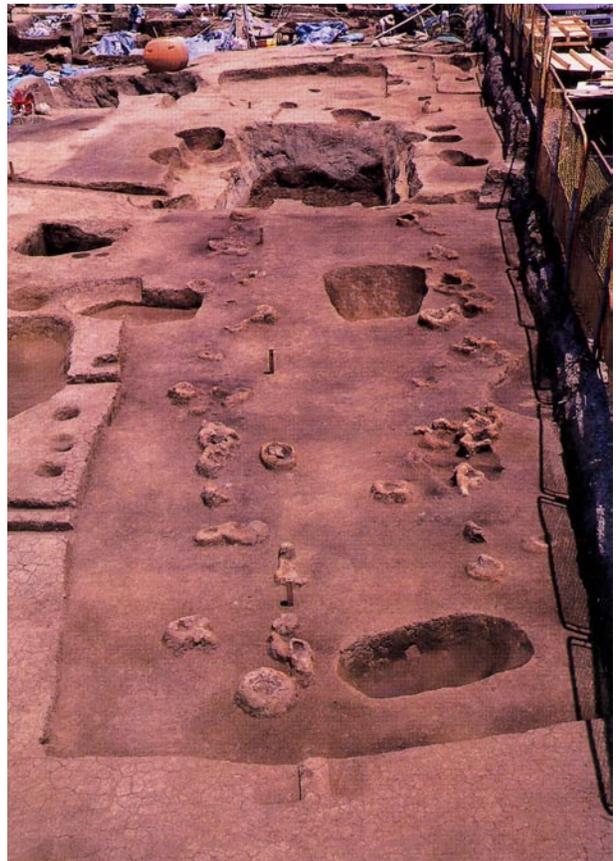
山王 A 遺跡 佐波理匙 平塚市教育委員会提供



構之内遺跡 銅印 平塚市教育委員会提供



神明久保遺跡 銅製海老錠 平塚市教育委員会提供



坪之内遺跡 鍛冶工房 林原利明氏提供



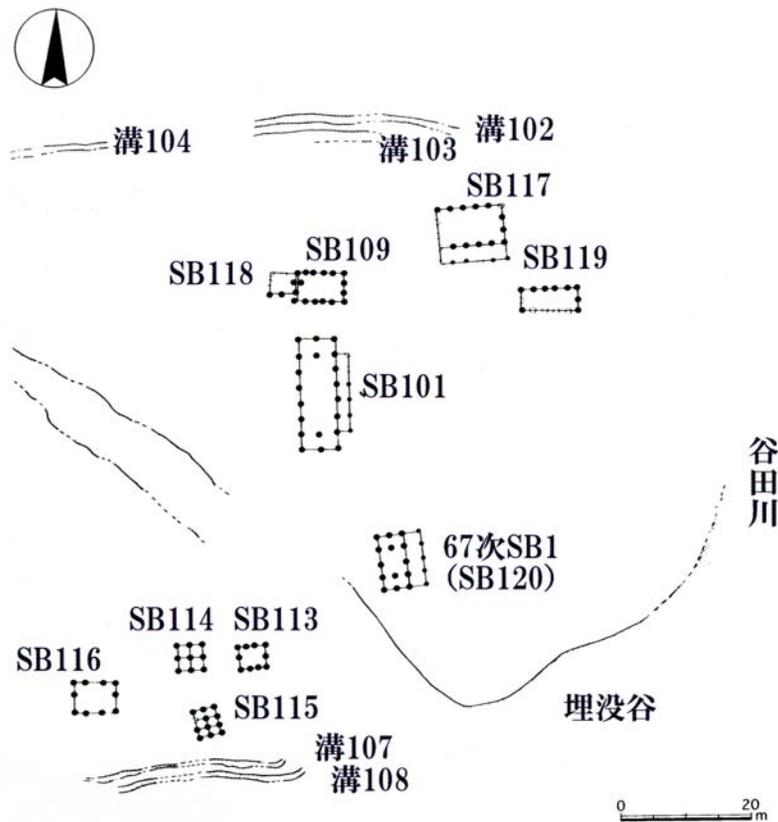
高林寺遺跡 「曹司」墨書 平塚市教育委員会提供

遠江国 ——— 静岡県磐田市御殿・二ノ宮遺跡

遠江国府の推定地には、御殿・二ノ宮遺跡と見附端城遺跡の2箇所があり、それぞれ中泉国府・見付国府と呼ばれています。奈良時代、中泉に置かれていた国府が平安期に見付へ移転したと考えられています。

御殿・二ノ宮遺跡は磐田原台地の南縁部分に位

置し、70回を超える発掘調査が行われ、国府に関連する考古学的な知見が得られています。国庁などの中枢的な施設は未発見ですが、廂を持つ大型の掘立柱建物が見つっています。建物101は南北棟で、東に廂を持ち、建物117は東西棟で南に廂を持ち、全体としてL字状に配置されています。



御殿・二ノ宮遺跡 建物配置図 (磐田市教育委員会 2001)

出土遺物には「厨」・「豊毅」の墨書土器・木簡・銅銚・二彩陶器・斎串・人形・人面墨書土器などがあります。「豊毅」の「毅」は軍団の長である軍毅を示すものです。木簡には郷名が記されたものや「馭家人」と記されたものがあります。これらの文字資料から軍団や馭家との関連も考えられます。斎

串・人形・人面墨書土器は川跡から出土したもので、水辺で行われた災厄を祓うまつりに使用されたものです。

当遺跡で見つかった建物群は、二彩陶器といった高級な調度品を有することから、国司館かあるいは国衙関連の饗応施設と考えられています。



御殿・二之宮遺跡 建物 101 磐田市教育委員会提供



御殿・二之宮遺跡 建物 117 磐田市教育委員会提供



御殿・二之宮遺跡 木筒 磐田市教育委員会提供

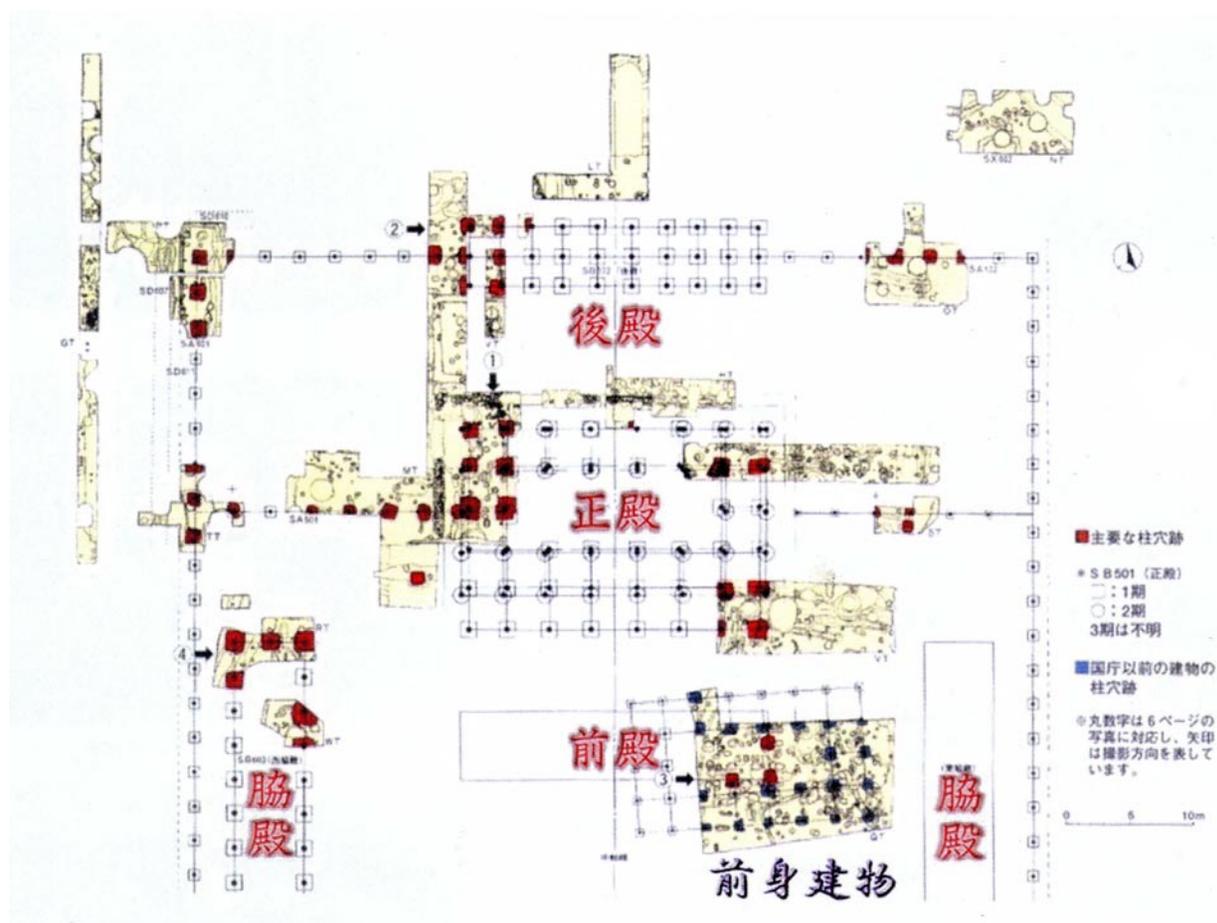


御殿・二之宮遺跡 二彩陶器
磐田市教育委員会提供

三河国 — 愛知県豊川市三河国府跡 (白鳥遺跡)

三河国府は従来、守公神社のある豊川市^{こう}国府町の^{まとば}的場遺跡と三河総社のある白鳥遺跡の2箇所が推定地として知られていました。昭和59年、宅地造成に伴う立会調査で「介□」と書かれた墨書土器が出土したことにより、国府跡として白鳥遺跡が注目され始めました。国司の次官である介^{すけ}に関係するものと考えられるからです。平成3年度か

らは三河国府跡の確認を目指して豊川市教育委員会により継続的な発掘調査が開始されました。平成7年には後に国庁正殿に伴うものであることがわかる石組みの雨落溝が確認され、平成8・9年には国庁の正殿・後殿・西脇殿・前殿・掘立柱塀などが確認されました。



三河国府跡 国庁模式図 (桜ヶ丘ミュージアム 2001)

国庁が確認されたのは三河総社の東側で、3期の変遷が明らかになりました。1期は8世紀第2四半期から9世紀前半頃で、掘立柱建物からなる正殿・前殿・後殿・西脇殿が確認されています。周囲には掘立柱塀がめぐり、北面は後殿妻中央に取り付きます。正殿は7間×5間の大規模な東西棟建物で、後殿は9間×2間の総柱建物です。2期は9世紀代で、1期同様掘立柱建物からなりま

す。前殿はなくなり、正殿・後殿・西脇殿が確認されています。正殿は規模が縮小し、7間×4間となります。3期は9世紀後半から10世紀中頃で、同一場所で礎石建物に建替えられた正殿・後殿が確認されています。西脇殿については攪乱のため未確認ですが、礎石立ちであったと考えられています。



三河国府跡 国庁周辺図 (桜ヶ丘ミュージアム 2001)



三河国府跡 国庁外郭の掘立柱塼 豊川市教育委員会提供



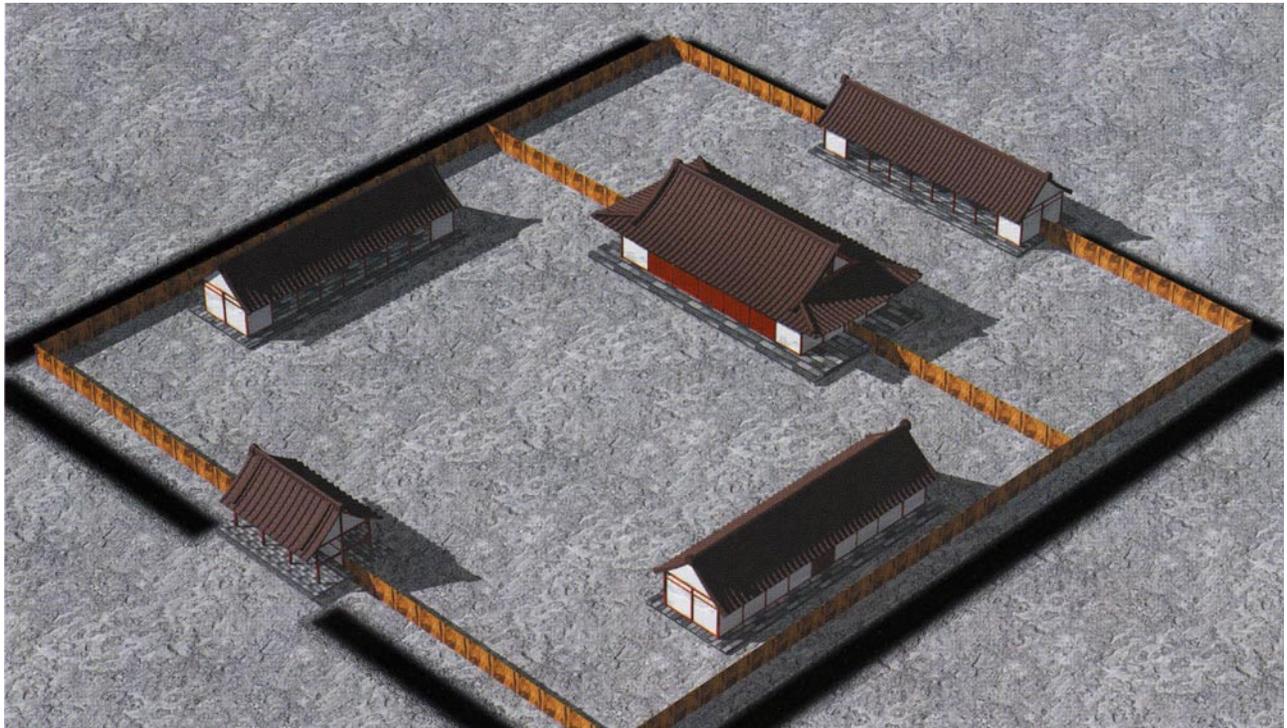
三河国府跡 国庁正殿の石組み雨落ち溝 豊川市教育委員会提供

このように三河国庁は掘立柱—掘立柱—礎石建物という変遷をたどります。出土する瓦類は三河国分寺創建瓦よりも古く位置づけられるもので、逆に2・3期には瓦が葺かれた形跡が見当たらないとされています。なお前殿付近からは、国庁とは建物方向が異なる国庁以前の廂付建物 SB601 が見つかっています。7世紀末から8世紀前半のものと考えられ、国庁整備に先行して存在していた大型建物として注目されます。

国庁の中軸線から西へ約90mの地点には117mに及ぶ南北溝があり、さらにこの溝から約80m西には、掘立柱塼と考えられる柱穴列が約47mに亘って確認されています。これらの遺構は国庁



三河国府跡 国庁正殿 豊川市教育委員会提供



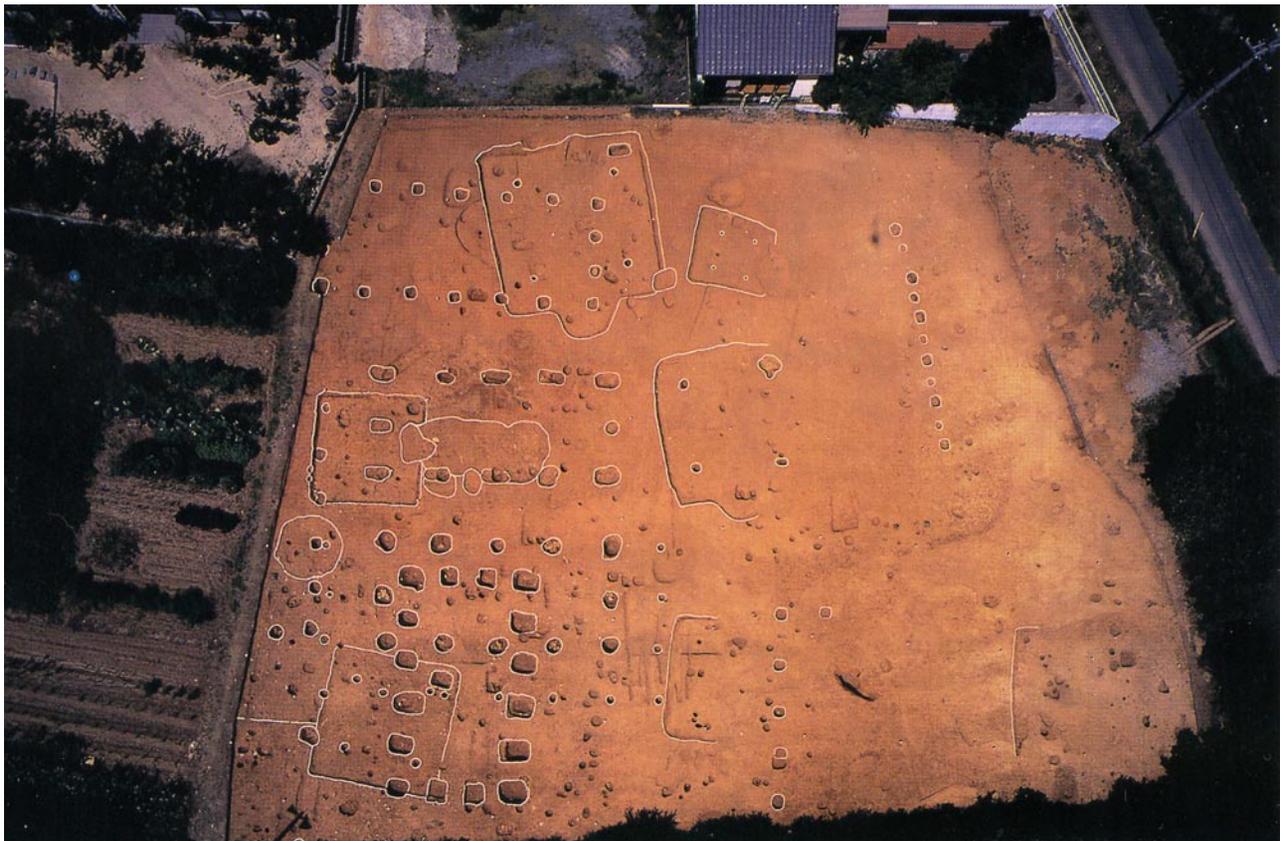
三河国府跡 3期国庁復元画像 ロックスプロ作成・桜ヶ丘ミュージアム提供



外郭や国庁に隣接する公的施設を区画するものと見られます。

国庁の北東300mの地点からは、3面廂付の建物を含む掘立柱建物群が検出されています。10世紀前半頃のもので、国司館に相当する可能性が考えられています。

国庁およびその周辺から出土した遺物には、蹄脚円面硯・羊形硯・墨書土器などがあります。羊形硯は全国的に極めて珍しいもので、平城宮跡や斎宮跡などのほか数例が知られるのみです。墨書土器は「國厨」が5点出土しており、うち3点は国庁後殿北の廃棄土坑から出土しました。



三河国府跡 99A 地点の推定国士館 豊川市教育委員会提供



三河国府跡 羊形硯 桜ヶ丘ミュージアム提供



三河国府跡 陶製印 桜ヶ丘ミュージアム提供



三河国府跡 「介□」墨書 桜ヶ丘ミュージアム提供



三河国府跡 「國厨」墨書 桜ヶ丘ミュージアム提供



三河国府跡 軒丸瓦・軒平瓦 桜ヶ丘ミュージアム提供

尾張国 ——— 愛知県稲沢市尾張国府跡

国府推定地のひとつである稲沢市松下・国府宮の尾張国府跡は木曾川の分流である三宅川右岸の自然堤防上に位置します。国府に直接関係する遺構は発見されていませんが、木簡や墨書土器などの文字資料や円面硯・風字硯などの硯類、石鈔・

銅印・白色陶質土器・乾元大宝・緑釉陶器などが出土しています。遺物の内容から最も有力な推定地で、9世紀以前は他所にあった可能性も考えられています。



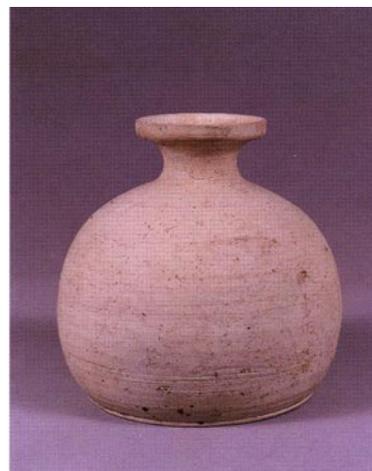
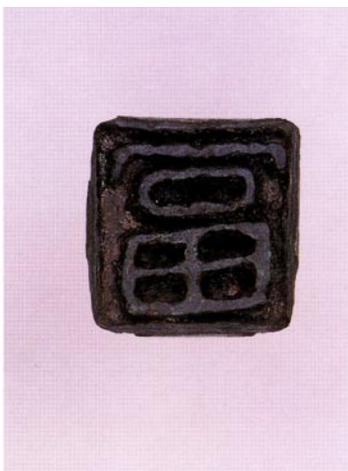
尾張国府跡 「玆富」銅印
稲沢市教育委員会提供



尾張国府跡 緑釉風字硯
稲沢市教育委員会提供



尾張国府跡 「富」銅印
稲沢市教育委員会

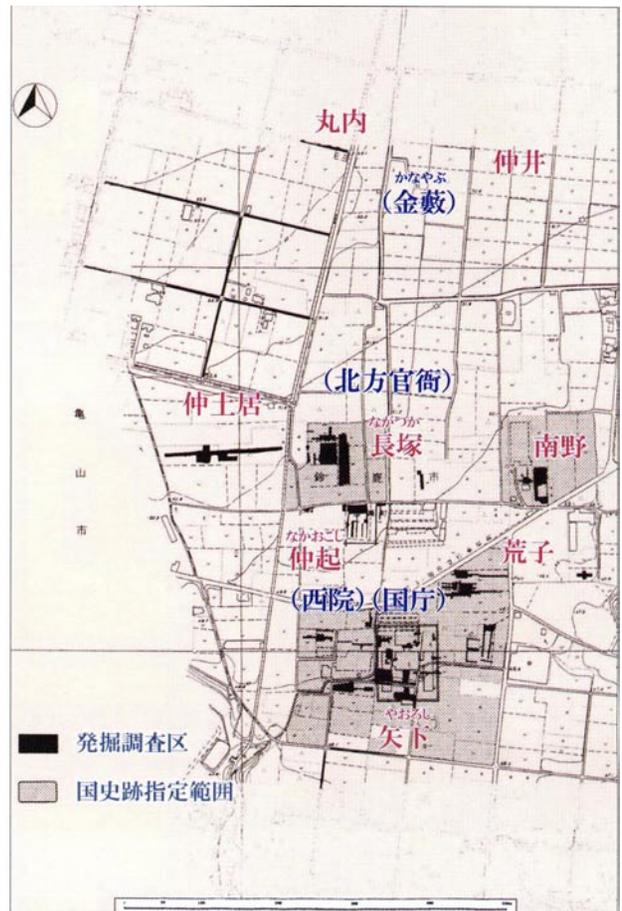


尾張国府跡 稲沢市指定文化財 白色陶質土器
稲沢市教育委員会

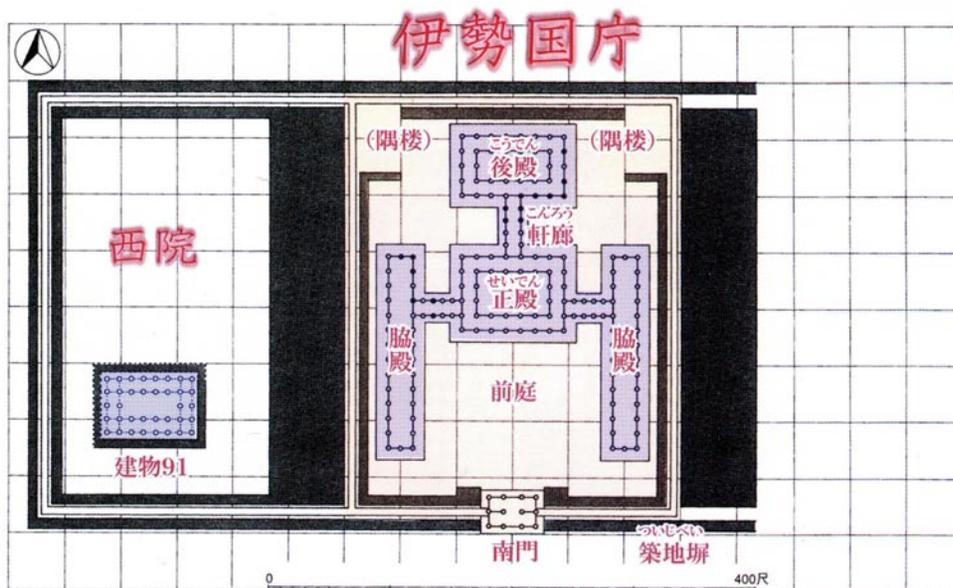
鈴鹿市広瀬町の長者屋敷遺跡は8世紀中頃の伊勢国府跡で、遺跡南辺部において瓦葺礎石建物から成る国庁が確認されています。築地塀に囲まれた国庁の範囲は東西約82m・南北109mで、正殿を中心に後殿・東西脇殿が軒廊で結ばれる平面形態は、隣国の近江国庁と酷似し、注目されました。北西及び北東隅には隅楼の存在が想定されますが、遺構としては確認されていません。いずれの建物にも建替の痕跡は無く、1時期のもので、平城宮跡6719A型式同范資料の出土から8世紀中頃の創建が考えられます。国庁の基壇は一部残存するものの、基壇化粧やその痕跡は調査によっても確認できず、未完成のまま9世紀初めまでには廃絶した可能性があります。

政庁の西には、東西約75mの区画である「西院」が付設されています。「西院」内の南寄りには建物も確認されています。政庁の機能を補うような施設であったと想像されます。

国庁の北には120m四方を1単位とする方格地割の存在が確かめられています。地割内には瓦葺礎石建物からなる建物群が発見され、地割に伴って幅12mの道路敷きも想定されます。いずれも存続期間は8世紀中ごろから9世紀初めまでと考えられ、国庁よりも後発の施設群であると想像されます。これらの建物群の性格としては曹司や館などの可能性が考えられますが、その格式の高さから儀式や饗宴・饗応に関わるものかもしれません。



伊勢国府跡 全体図 (鈴鹿市教育委員会 2002)

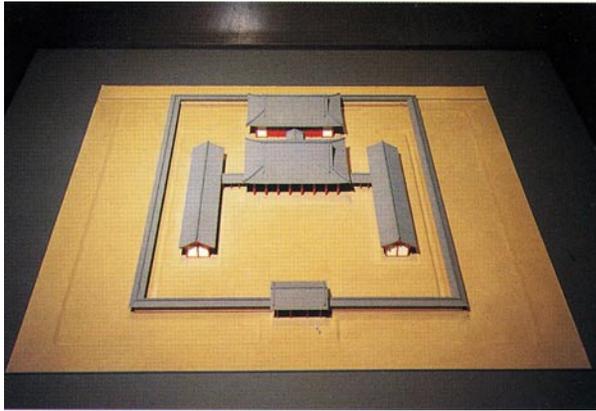


伊勢国府跡 国庁の建物配置 (鈴鹿市教育委員会 2001)

遺跡の北辺では竪穴建物が検出されています。国衙の整備期に設けられた造営キャンプであると考えられます。これに対して国庁の北東に隣接して検出された竪穴建物や掘立柱建物は廃絶時の解体・移転に関わるものか工房関連と考えられます。出土遺物の大半は瓦類で、土師器・須恵器などの土器類は非常に少ないのが特徴です。墨書土器は皆無で、定型硯は1点も出土していません。「西院」や方格地割内の建物群からは文字瓦（「人」・「守」・「上」・「水」・「宿」・「巴」・「羊」など）が出土しています。



伊勢国府跡 国庁・西院・北方官衙位置図（鈴鹿市教育委員会 2002）



伊勢国府跡 国庁模型



伊勢国府跡 国庁後殿地覆



伊勢国府跡 国庁



伊勢国府跡 国庁北軒廊



伊勢国府跡 国庁西脇殿礎石抜取



伊勢国府跡 国庁南門東の溝



伊勢国府跡 西院の建物 SB91



伊勢国府跡 北方官衙(南野地区)の建物 SB01



伊勢国府跡 北方官衙(長塚地区)落下瓦



伊勢国府跡 北方官衙(長塚地区)の建物 SB27



伊勢国府跡 長者屋敷遺跡の土師器・須恵器



伊勢国府跡 長者屋敷遺跡の文字瓦



伊勢国府跡 長者屋敷遺跡の鬼瓦

伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）の南約 3.5km に位置する鈴鹿市国府町は、地名から国府所在地と考えられてきた地域です。総社とされる三宅神社や中世城館がある「長ノ城」は国府に関連するものと考えられてきました。この地域では三宅神社遺跡・天王山西遺跡・梅田遺跡などが調査されています。

三宅神社遺跡では 5 次に互って調査が実施され、奈良・平安・鎌倉時代の遺構や遺物が確認されています。9～10 世紀代の掘立柱建物がまともに見つかり、8 世紀前半の井戸や 9 世紀初めの井戸も見つかっています。遺物には墨書土器「四」・「在」・朱墨付転用硯・緑釉陶器・斎串・横櫛・文字瓦「小」などがあります。文字瓦は長者屋敷遺跡で出土しているものと同じです。下級官人の館や居宅である可能性があります。

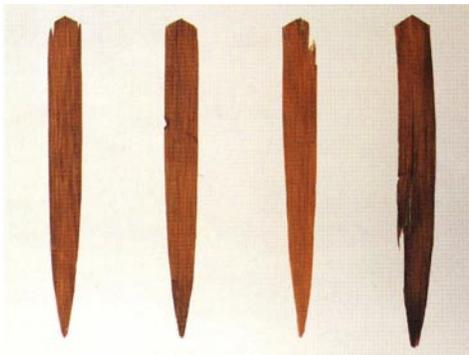
天王山西遺跡は三宅神社遺跡の東南に位置する遺跡で、8～12 世紀の遺構や遺物が見つかっています。18 棟検出されている掘立柱建物の大半は 10 世紀頃のもので、出土遺物には緑釉陶器や円面硯もあり、国府関連集落と考えられます。



伊勢国府跡 長者屋敷遺跡の軒丸瓦



伊勢国府跡 長者屋敷遺跡の軒平瓦



三宅神社遺跡 斎串



三宅神社遺跡 横櫛



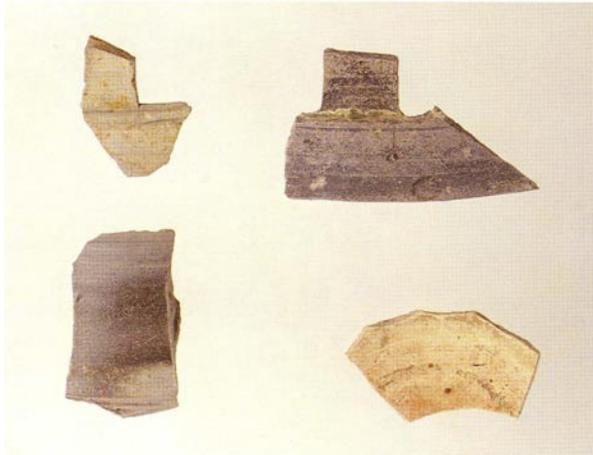
三宅神社遺跡 調査区全景



三宅神社遺跡 土師器・須恵器



三宅神社遺跡・天王山西遺跡 緑釉陶器



三宅神社遺跡・天王山西遺跡 円面硯・転用硯



三宅神社遺跡 「在」「四」墨書土器



三宅神社遺跡 「小」文字瓦・「川」墨書土器他



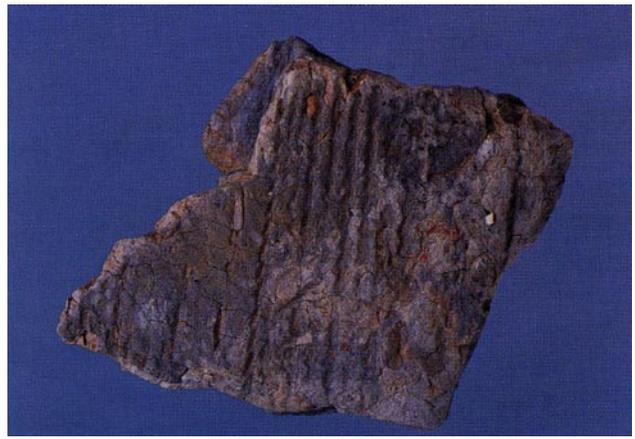
天王山西遺跡 調査区全景



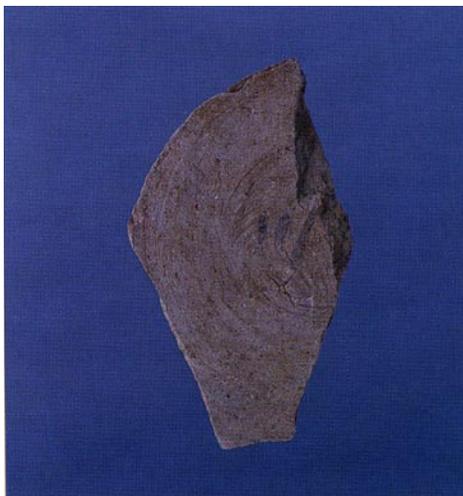
梅田遺跡 調査区全景

梅田遺跡は三宅神社遺跡の北東1 km に位置する遺跡で、9世紀初頭を中心とした遺構や遺物が見つかっています。遺構には竪穴建物・掘立柱建物・土坑があります。掘立柱建物には廂を持つものや柱筋を揃えるものがあります。長者屋敷遺跡と同印の文字瓦も見つかっています。平安時代の国府関連集落と考えられています。鎌倉時代には再び居住地となり、堀を有する館が作られます。

国府町に所在するこれらの遺跡では、官衙に直接関係する成果は得られていません。とはいえ近在に官衙が存在する可能性を考えるには、遺物や遺構の内容から一定の条件を満たしていると云えます。伊勢国府が長者屋敷遺跡から国府町へ移転し、その時期が9世紀初めと考えることについても今のところ妥当なところでしょう。長者屋敷遺跡では墨書や硯といった官衙の実務に関わる資料の欠落が見られることから、当遺跡だけで国府の役割を果たしていたとは思えません。遺跡の存続期間が短いことも考慮するなら、一貫して他所に国衙機能の一部があったことも考えられます。伊勢国府の場合、国府の移転の他に、国庁の整備によって国府域が飛び地的に拡大する時期があったとする仮説も成り立つかもしれません。



梅田遺跡 「中？」文字瓦



梅田遺跡 「川」墨書



梅田遺跡 掘立柱建物

伊賀国 —— 三重県上野市伊賀国府跡

伊賀国府は、『わみょうるいじゅうしょう和名類聚抄』などの古辞書類によると阿拝郡にあったとされ、主につげ柘植川と服部川に挟まれた沖積低地を中心にその所在が探求されてきました。平成元年には、柘植川北岸で調査が実施され、字国町地内において4期の変遷をたどる国庁が確認されました。

1期は8世紀後半から9世紀初頭で、掘立柱建物からなる正殿・前殿・東西脇殿が確認され、脇殿の北には楼状の建物があります。周囲には東西41.4 mの掘立柱塀がめぐります。

2期は9世紀代で、正殿・前殿は東西規模を大きくし、脇殿はややずれて建て直されます。楼状の建物は消え、南に四脚門を伴うことがわかっています。



伊賀国府跡 国庁全景 三重県埋蔵文化財センター提供

3期は10世紀で、前殿が無くなり、正殿・脇殿が礎石立ちとなります。南面の掘立柱塀は南に移動し、門は八脚門となります。

4期は10世紀末から11世紀で、国庁建物の配

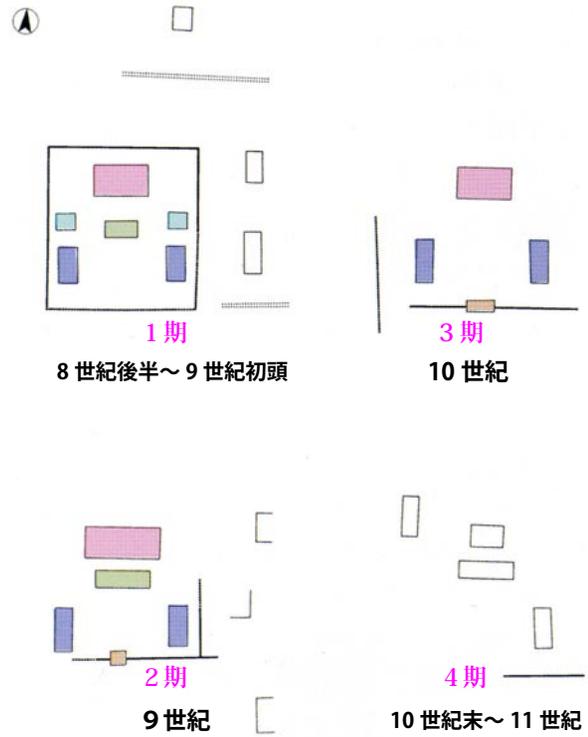
置が崩れていく時期で、東西棟建物2棟と南北棟建物1棟が検出されています。

国庁の周囲からは各時期の建物が確認されています。これらの外郭官衙は、国庁の東側を中心に検出されています。

出土遺物には、緑釉陶器・二彩陶器・墨書土器（「國廚」または「國府」と読めるものを含む）・硯類があり、国庁の時期よりも遡る時期の木簡が出土しています。



伊賀国府跡 西脇殿 三重県埋蔵文化財センター提供



伊賀国府跡 国庁の変遷 (齋宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター 1996)



伊賀国府跡 正殿・全殿 三重県埋蔵文化財センター提供



伊賀国府跡 硯 三重県埋蔵文化財センター提供

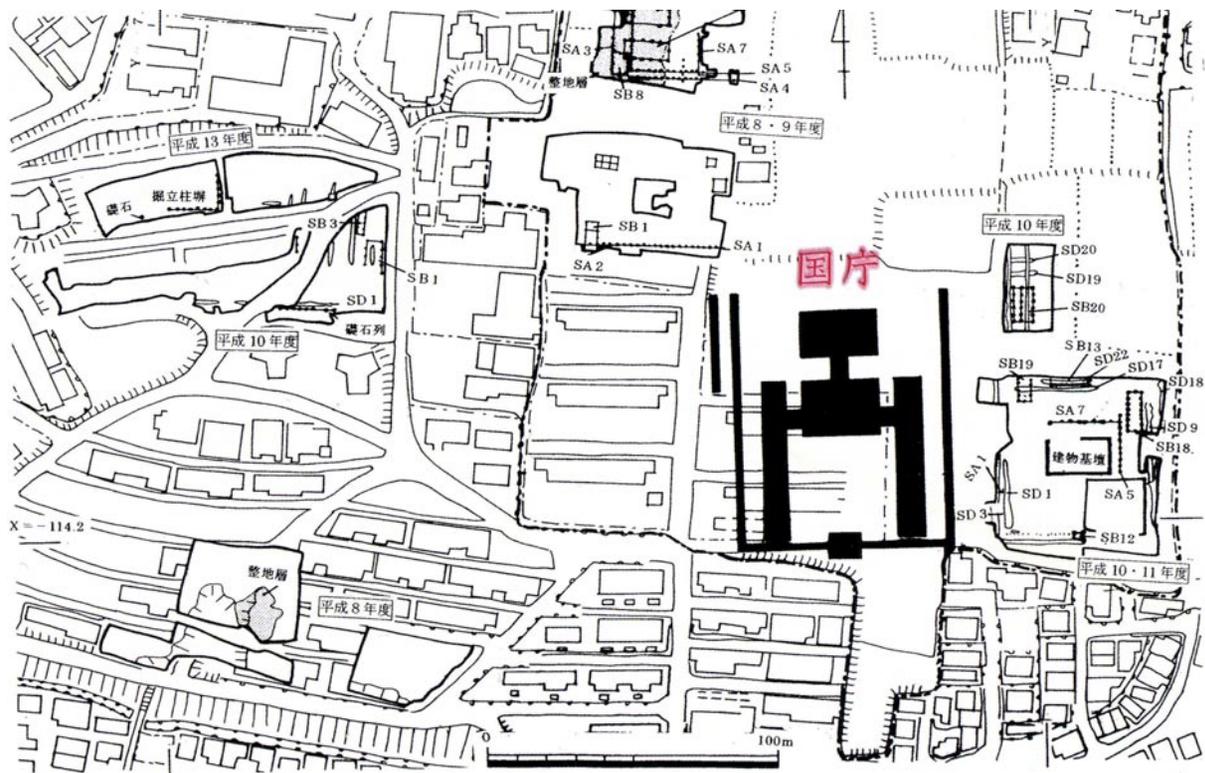


伊賀国府跡 土器 三重県埋蔵文化財センター提供

近江国 —— 滋賀県大津市国指定史跡近江国庁跡附惣山遺跡・青江遺跡

近江国府は、大津市瀬田の大江三丁目付近に方八町域が想定され、その南辺部において昭和38年に国庁が発見されました。近江国庁跡の調査では、初めて国府中枢部の構造が明らかになり、その後の国府研究の指針となりました。瓦積基壇からなる建物跡が確認され、正殿を中心に後殿・東西脇殿が軒廊で結ばれます。脇殿の南端には楼状の建

物が付加されます。周囲の築地塀の範囲は東西72m・南北108mで、さらに外郭南方から門が見つかっています。飛雲文系軒瓦が創建期のものと考えられ、その時期は8世紀中頃とする意見と9世紀前半とする意見があります。最近になって政庁の東にも同様の区画があることが明らかになりました。この区画内には木製外装基壇を持つ建物が



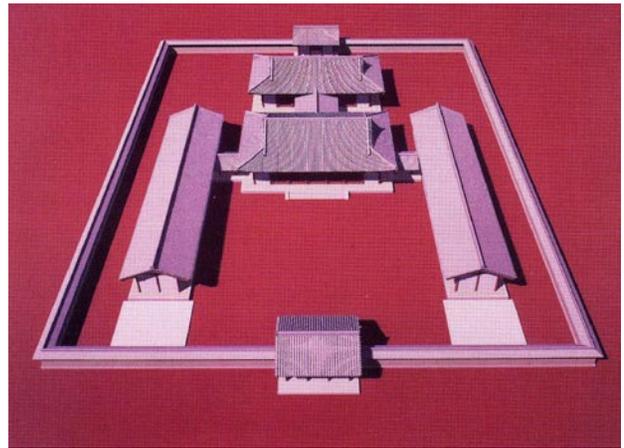
近江国府跡 国庁周辺図 (滋賀県教育委員会他 2001)

あり、厨と饗宴場の機能を併せ持つ施設と推測されています。

国庁の周辺からは曹司や館など国府関連の建物が多数見つかっています。国庁の北西からは掘立柱塀や掘立柱建物が見つかり、曹司と考えられています。国庁南方の青江遺跡からは築地塀に囲まれた一郭が調査され、2回の建替えが見られる建物が見つかりました。国庁と同様飛雲文系の瓦が使用され、3回目の建物は礎石立ちとなります。国司館の一つと考えられています。国庁の東400mに位置する惣山遺跡からは、南北21m・東西6mの瓦葺礎石建物が見つかりました。この建物は、倉庫と考えられ、南北に12棟縦列することが確認されています。他に例のない倉庫群で、その機能も含め注目されています。



近江国府跡 国庁周辺図 (滋賀県教育委員会他 2001)



近江国府跡 国庁周辺図 (滋賀県教育委員会他 2001)



近江国府跡 国庁周辺図 (滋賀県教育委員会他 2001)



近江国府跡 国庁周辺図 (滋賀県教育委員会他 2001)



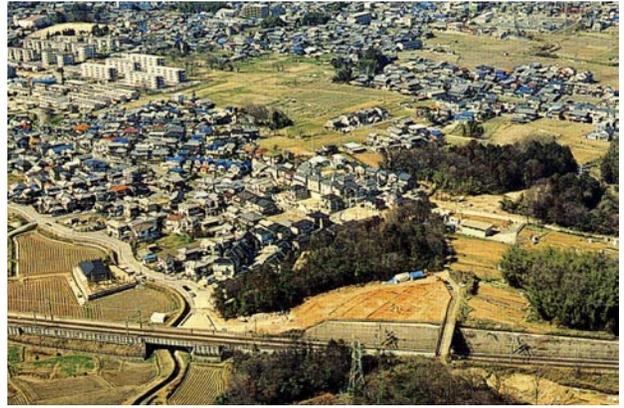
近江国府跡 国庁周辺図 (滋賀県教育委員会他 2001)



近江国府跡 国庁周辺図 (滋賀県教育委員会他 2001)



近江国府跡 国庁東の木装基壇 滋賀県教育委員会提供



惣山遺跡 遠景 大津市埋蔵文化財センター提供



青江遺跡 調査区全景 大津市埋蔵文化財センター提供

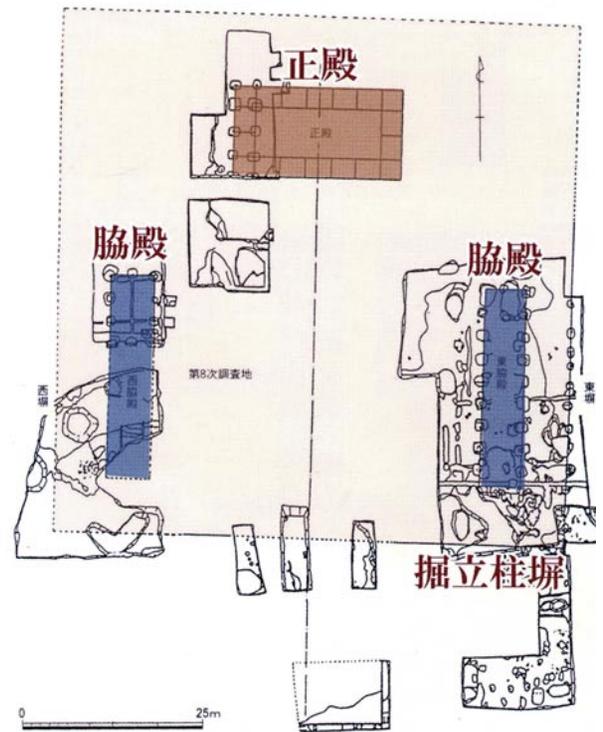
美濃国 —— 岐阜県不破郡垂井町美濃国府跡

垂井町府中にあると推定されてきた美濃国府跡は、垂井町教育委員会と三重大学考古学研究室により平成3年から調査が始まりました。平成8年には、御旅神社周辺において東脇殿の発見により国庁の所在が確定しました。周囲に東西 67.2 m・南北 60 m 以上に亘って掘立柱塀がめぐらされ、正殿と東西脇殿が確認されており、同一場所における3期の変遷が考えられています。

I期は、8世紀前半代と推定され、正殿・脇殿ともに掘立柱建物からなります。II期は8世紀中葉以降とされ、I期建物をわずかに東にずらして建替えられた掘立柱建物です。III期は9世紀と推定され、礎石立ちに変わります。

国庁の東隣からは南北の大溝や掘立柱建物が検出され、「政所」と書かれた墨書土器が出土したことから、東方官衙地区と名づけられました。国庁の北方からも掘立柱建物や鍛冶遺構が見つかり、関連施設の存在がうかがえます。

遺物には墨書土器や緑釉陶器・円面硯・朱墨付き転用硯があります。



美濃国府跡 国庁遺構図 (垂井町教育委員会 1999)



美濃国府跡 2期政庁 垂井町教育委員会提供



美濃国府跡 3期政庁 垂井町教育委員会提供



美濃国府跡 東脇殿 垂井町教育委員会提供



美濃国府跡 東掘立柱塀 垂井町教育委員会提供



美濃国府跡 国庁北の掘立柱建物 垂井町教育委員会提供



美濃国府跡 国庁東の大溝 垂井町教育委員会提供



美濃国府跡 国庁東の掘立柱建物 垂井町教育委員会提供

信濃国府は『和名類聚抄』によると筑摩郡にあるとされることから、松本地方が平安期における所在地と考えられています。奈良時代に信濃国分寺が置かれた上田地方も有力な国府推定地の一つであるため、小県郡から筑摩郡への国府の移転が推定されています。今のところ国府の所在を示す考古学的な成果は得られていませんが、今後の調査に期待が持たれます。

信濃国府関係で最も注目される遺跡は、国道建設に伴って調査された屋代遺跡群です。流路から斎串や人形などの木製祭祀具や木簡が出土し、掘立柱建物が見つかりました。木製祭祀具は官衙に関わる祭祀で用いられたものと考えられ、付近に埴科郡衙や初期国府が存在したと見られています。

出土した木簡には「符」という文字で始まるものが2種類あります。「符」とは公式令で規定された文書様式のうち、上級の役所から下級の役所へ命令を出すときの書式です。符の次に郡名が来るものは、国司から郡司へ宛てた国符木簡で、郷名が来るのは、郡司から郷長さらには里正へ宛てた郡符木簡です。この遺跡の国符木簡は8世紀の初め頃のものと考えられ、差出元である国衙に逡送されて、廃棄された可能性も考えられています。この時期の国司は独立した庁舎を持たず、郡衙を拠点として活動していたと考えられており、上田地方に国衙ができる前の初期国府が屋代遺跡群のある埴科郡に置かれていた可能性が示唆されます。



屋代遺跡群 調査風景 長野県立歴史館提供



屋代遺跡群 木製祭祀具 長野県立歴史館提供



屋代遺跡群 国符木簡 長野県立歴史館提供

下野国庁跡は、昭和 51 年から調査が開始され、宮野辺神社周辺で約 90 m 四方の国庁が確認されました。国庁は同一場所における 4 期の変遷が考えられていますが、中心殿舎である正殿は宮野辺神社の敷地内となっており、未検出です。

I 期は 8 世紀前半で、掘立柱建物からなる前殿・脇殿・南門と周囲の掘立柱塀が確認されています。前殿は梁間 2 間・桁行 4 間の建物が 2 棟並列します。次の II 期脇殿柱掘方内から瓦が出土していることから、正殿が瓦葺であった可能性が考えられています。

II 期は 8 世紀後半代で、前殿が梁間 2 間・桁行 7 間の瓦葺礎石建物となり、脇殿や南門は瓦葺掘立柱建物となります。北辺及び南辺の塀には廊状の建物が付設されます。この時期の建物群は 8 世紀末に焼失しています。なお国庁の南面には、掘立柱塀による区画が中軸の道路を挟んで 2 区画設けられ、内部に南北棟の瓦葷礎石建物があったと考えられます。

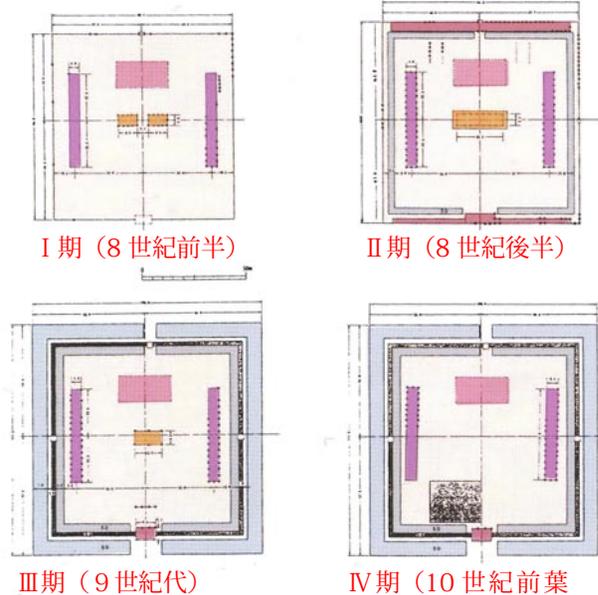
III 期は 9 世紀代です。前殿は梁間 1 間・桁行 2 間の小規模な掘立柱建物となり、脇殿・南門は礎石建物、外周は築地または土塁となります。南門の北には目隠し塀が設けられます。



下野国庁跡 II 期国府模型 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 国庁全景 栃木県教育委員会提供



下野国府跡 政庁の変遷 (木村 1999)



下野国庁跡 推定国司介館遺構 栃木県教育委員会提供

IV期は9世紀後半から10世紀前葉で、脇殿が掘立柱建物になります。前殿はなくなり、前庭は小石敷きとなります。

国庁の南方からは塀で囲まれた掘立柱建物群が見つかり、「介」の墨書土器が見つかりました。II期の国司館と推定されています。国庁の北方からは建物方位の異なる廂付きの大型建物が見つかり、V期(10世紀以降)の施設と考えられます。

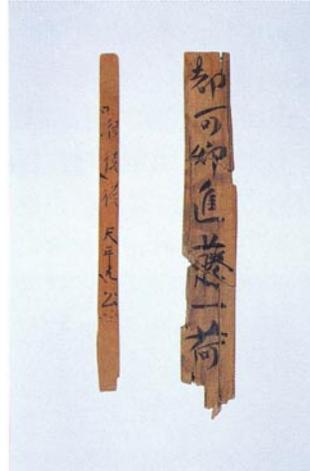
出土遺物には、「介」・「國厨」・「國府氷」などの墨書土器、「天平元」・「延暦十」・「都可郷進藤一荷」などの木簡、漆紙文書、円面硯、緑釉陶器、瓦類があります。



下野国庁跡 国庁北方のV期官衙遺構 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 II期鏡瓦・宇瓦 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 木簡(レプリカ) 栃木県立博物館提供



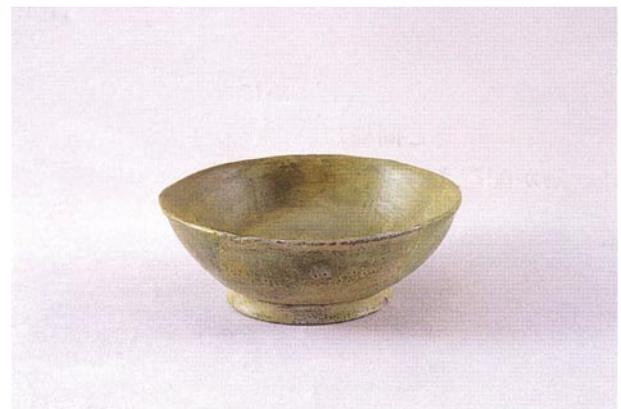
下野国庁跡 「國厨」墨書 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 「國府氷」墨書 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 「介」墨書 栃木県立博物館提供



下野国庁跡 緑釉陶器 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 円面硯 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 円面硯 栃木県教育委員会提供



下野国庁跡 儀式復元画像 篠原祐一氏提供

陸奥国 ——— 宮城県仙台市郡山遺跡・多賀城市国指定特別史跡多賀城跡附寺跡・館前遺跡

古代の東北地方には律令国家に属さない蝦夷の領域が広がり、公民化と郡制施行による律令制への取り込みが図られました。そのため、陸奥・出羽・越後は辺要国と位置付けられ、この3国には「饗給（撫慰）」・「斥候」・「征討」という特殊な任務がありました。

中央政府が蝦夷支配の拠点として設けた施設に城柵があります。史料上は大化3（647）年の淳足柵以降20の城柵が知られる一方、発掘調査によってもいくつかの城柵が明らかになっています。内郭には官衙遺跡と同様にコの字状または品の字状に建物が配置され、周囲に築地塀がめぐらされた政庁があり、外郭は材木塀等で囲まれます。城柵が単なる軍事拠点としてだけでなく、行政機能を併せ持った地方官衙的性格を有することが推測されています。なかでも陸奥鎮所（多賀城）や出羽柵（秋田城）は陸奥国・出羽国それぞれの一大拠点でした。

郡山遺跡は7世紀中葉に造営されたと見られる地方官衙で、材木塀等で囲まれた外郭の範囲は東西300m・南北600mに及びます。このI期官衙は中心軸を真北で東へ約30度傾けて設けられています。7世紀末になると大規模な改修を受け、一辺約428mの正方形の区画が設けられます。このII期官衙は、真北を中心軸とし、外郭には材木塀と大溝がめぐります。中心の政庁部分からは正殿などの主要殿舎の他、石組池や石敷きが見つかり、外郭の南方では付属寺院である郡山廃寺が見つっています。地方官衙の中でも初期のものに属し、多賀城が造営される頃には廃絶します。I期官衙は軍事拠点を兼ねた名取評の初期評衙で、より構造的に官衙として整備が進んだと見られるII期官衙は、名取評衙であるとともに初期陸奥国衙としての機能も担っていた可能性が考えられています。

鎮守府が置かれ、陸奥国府の中心的な施設であった多賀城跡は低丘陵上に営まれています。外郭は主に築地塀からなり、南辺約 860 m・東辺約 1000 m・北辺約 770 m・西辺約 670 m に及びます。中央の政庁は東西 103.1 m・南北 116.4 m の築地塀に囲まれた一郭です。日本三古碑の一つである『多賀城碑』や『続日本紀』・『日本三代実録』などの史料から 4 期に分けて理解されています。

I 期は神亀元 (724) 年～天平宝字 6 (762) 年で、掘立柱建物の正殿・東西脇殿・南門・東西南門前殿からなります。脇殿は桁行が短く、脇殿が長大な他の国庁とは大きく異なります。

II 期は天平宝字 6 (762) 年から宝亀 11 (780)

年で、蝦夷出身で、伊治郡大領であった伊治公岩麻呂の蜂起により焼失しました。全ての殿舎が礎石建物になり、後殿が新設されました。前庭は石敷となり、東西脇殿は築地に取り付くように設けられます。北辺築地には北殿が取り付け、八脚門の南門には翼廊が付設されます。

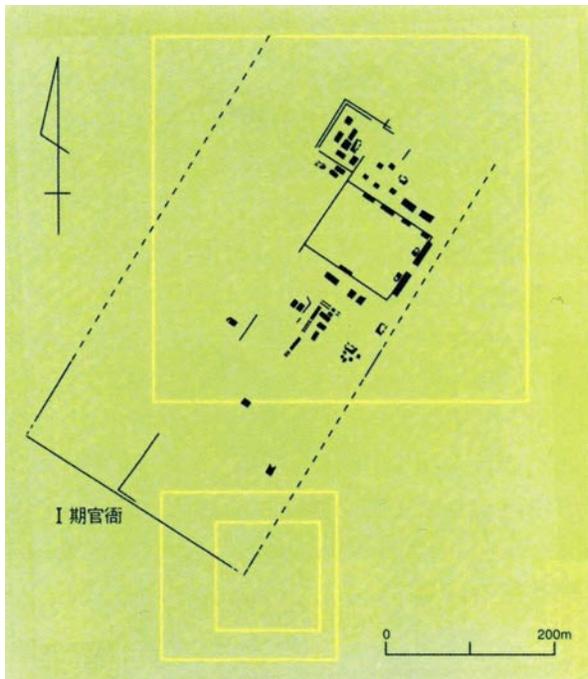
III 期は宝亀 11 (780) 年から貞観 11 (869) 年で、2 つの小期に分かれます。III-1 期は焼失後の暫定的建物で掘立柱建物からなり、後の本格的造営に備え、III-2 期の建設予定地を避けて建てられています。III-2 期は、凝灰岩切石積基壇の正殿が建てられ、脇殿・後殿・正殿東西の楼状建物は礎石立ちとなります。



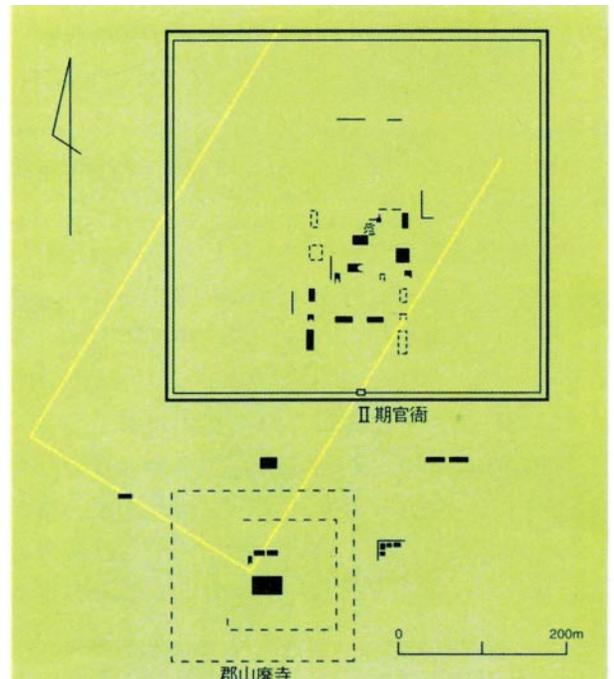
郡山遺跡 II 期官衙正殿東側の大型建物 仙台市教育委員会提供



郡山遺跡 石組み池 仙台市教育委員会提供



郡山遺跡 官衙遺構の変遷 (横浜市歴史博物館 2002)



IV期は貞観 11（869）年から 10 世紀中頃ないし後半で、3つの小期に分かれます。IV-1 期は後殿が新築され、IV-2 期は政庁北東及び北西に掘立柱建物が建てられ、IV-3 期は正殿の北西に建物が建てられ、政庁の対称的な建物配置が崩れていく時期です。



多賀城跡 正殿跡 宮城県多賀城跡調査研究所提供

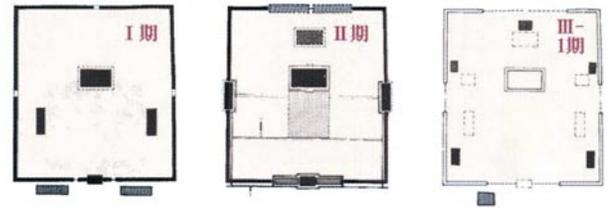


多賀城跡 六月坂地区の礎石建物 宮城県多賀城跡調査研究所提供

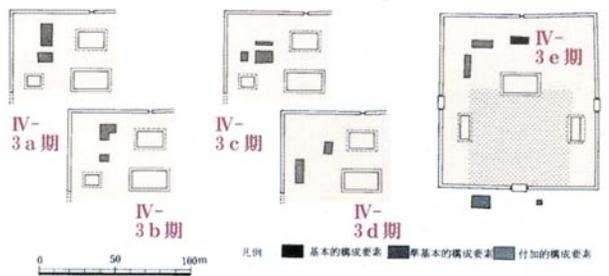
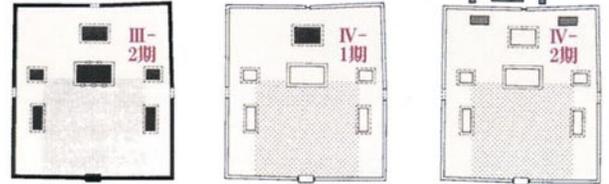


多賀城跡 II期政庁模型 東北歴史博物館提供

I 期：神亀元 (724) ~天平宝字 6 (762) II 期：天平宝字 6 (762) ~宝亀 11 (780) III 期：宝亀 11 (780) ~貞観 11 (869)



IV 期：貞観 11 (869) ~ 10 世紀中頃ないし後半



多賀城跡 政庁の変遷 (宮城県教育委員会 1982)



館前遺跡 掘立柱建物 多賀城市教育委員会提供

多賀城では政庁以外にもいくつかの官衙ブロックが明らかになっています。六月坂地区もそのひとつで、四面廂付の掘立柱建物や礎石建物が検出されています。

多賀城の城外南にあたる館前遺跡からは四面廂を持つ大規模な掘立柱建物が確認され、山王遺跡で

も大型建物が確認されています。いずれも国司館であると推定されています。これら関連遺跡周辺からは、南北大路・東西大路を基準とする方格地割が確認されています。9世紀初頭に成立したものと考えられ、この方格地割を含む南北850m・東西2kmの範囲が国府域として捉えられています。

出羽国

—— 秋田県秋田市国指定史跡秋田城跡

山形県酒田市国指定史跡城輪柵跡・山形県飽海郡八幡町八森遺跡

和銅元(708)年越後国に出羽郡が設けられ、庄内地方にあったとされる出羽柵が軍事拠点でした。和銅5(712)年出羽郡に陸奥国最上・置賜郡を加えて出羽国が設けられ、天平5(733)には出羽柵がさらに北の秋田村高清水へ遷されました。この地はやがて秋田城と呼ばれるようになり、出羽国府として日本海側における対蝦夷政策の拠点となりました。

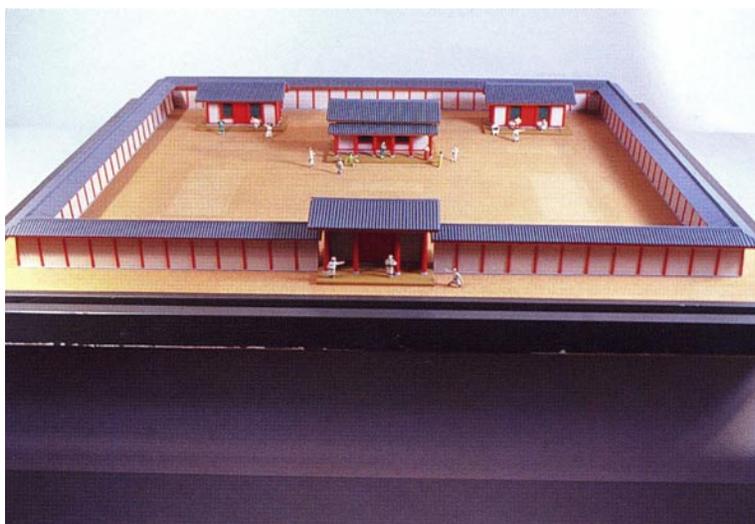
秋田城跡は、東西・南北約550mの不整形をした築地塀からなる外郭を持ち、中心に東西94m・南北77mの築地塀に囲まれた政庁があります。政庁では正殿とその北西及び北東から東西棟建物が確認されています。出羽国府が置かれた8世紀前半以降6期の変遷をたどりながら10世紀代まで存続します。



秋田城跡 正殿 秋田市教育委員会提供



秋田城跡 政庁東辺・北辺築地・柱列 秋田市教育委員会提供



秋田城跡 政庁模型 秋田市教育委員会提供

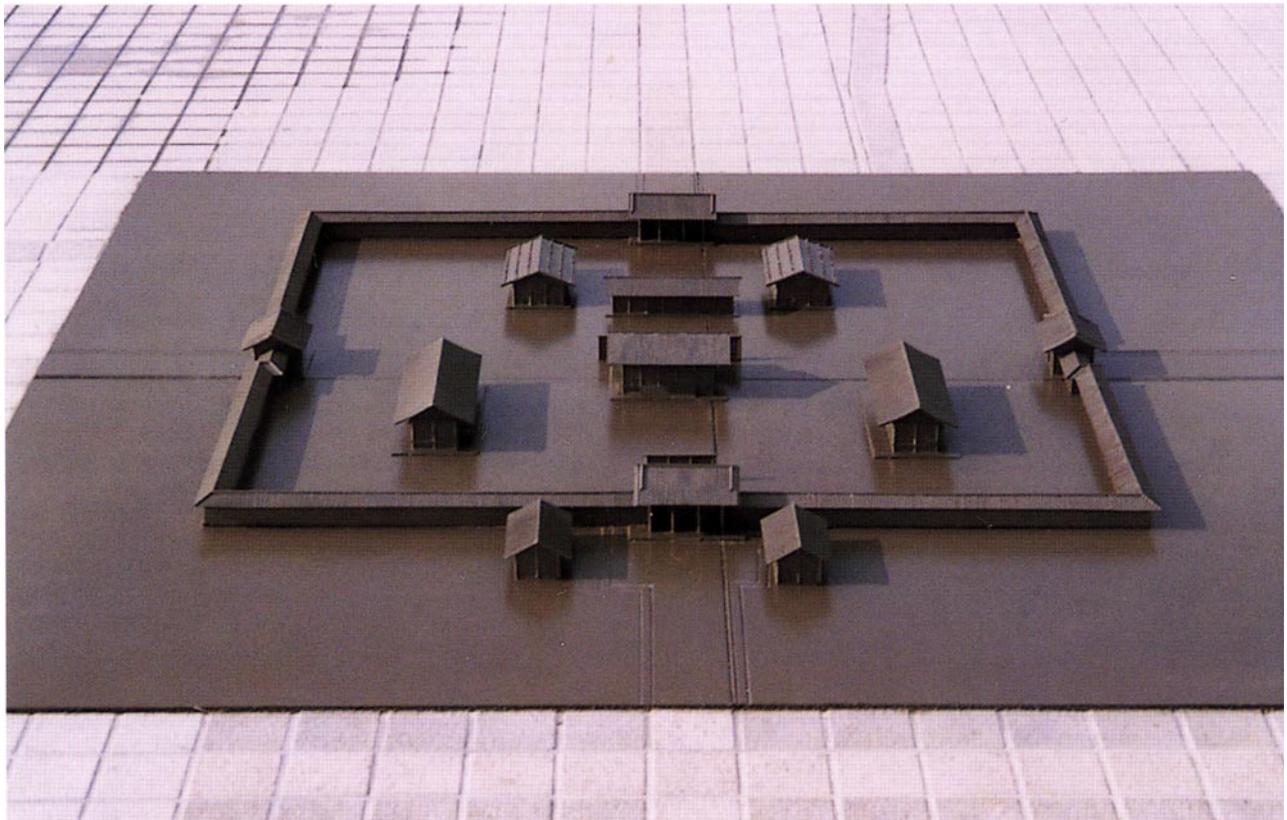


秋田城跡 復元された政庁南門 酒田市教育委員会提供

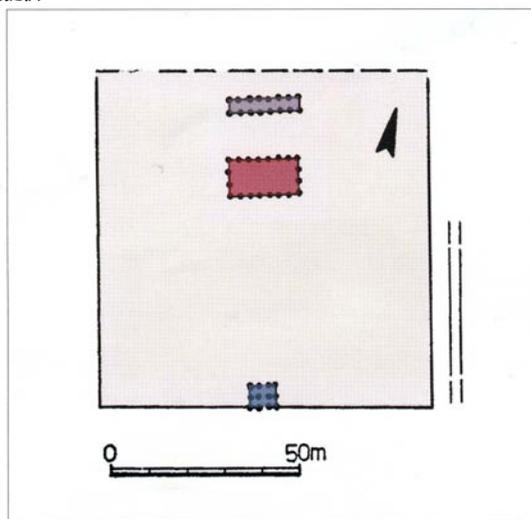
平安期になると出羽国府は南の城輪柵跡^{きのわさくあと}に移されたと考えられています。柵木などにより約720m四方の外郭が設けられ、中心に築地塀あるいは掘立柱塀で囲まれた一辺115mの政庁があります。正殿・後殿・東西脇殿などの主要殿舎には建替えが認められ、数時期の変遷が考えられています。『日本三代実録』仁和3(887)年の条には出羽国府移転に関する記事があり、城輪柵跡の約3km東に位置する八森遺跡^{はちもり}は9世紀後葉から10世紀初めにかけての一時的な国府移転先であったと考えられています。



城輪柵跡 史跡整備された政庁 酒田市教育委員会提供



城輪柵跡 政庁模型 酒田市教育委員会提供



八森遺跡 政庁 (国立歴史民俗博物館 1986)

番号	遺跡名	所在地	資料名	所蔵（保管）機関	備考
1	常陸国街跡	茨城県石岡市	埴	石岡市教育委員会	
2	常陸国街跡	茨城県石岡市	円面硯	石岡市教育委員会	
3	常陸国街跡	茨城県石岡市	軒丸瓦	石岡市教育委員会	
4	常陸国街跡	茨城県石岡市	軒平瓦	石岡市教育委員会	
5	常陸国街跡	茨城県石岡市	軒丸瓦	石岡市教育委員会	
6	常陸国街跡	茨城県石岡市	須恵器盤	石岡市教育委員会	朱墨
7	常陸国街跡	茨城県石岡市	須恵器盤	石岡市教育委員会	「灰厨」墨書
8	常陸国街跡	茨城県石岡市	須恵器坏	石岡市教育委員会	「兵」墨書
9	常陸国街跡	茨城県石岡市	須恵器坏	石岡市教育委員会	「大舎？」墨書
10	常陸国街跡	茨城県石岡市	円面硯	石岡市教育委員会	
11	国府台遺跡	千葉県市川市	鉄鉗	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
12	国府台遺跡	千葉県市川市	刀子	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
13	国府台遺跡	千葉県市川市	毛抜き	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
14	国府台遺跡	千葉県市川市	鉄鏃	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
15	国府台遺跡	千葉県市川市	三彩陶器小壺	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
16	国府台遺跡	千葉県市川市	土師器皿	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	「芳」墨書
17	国府台遺跡	千葉県市川市	鉄鏃	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
18	国府台遺跡	千葉県市川市	鉄鏃	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
19	国府台遺跡	千葉県市川市	鉸具	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
20	国府台遺跡	千葉県市川市	銅鍔鉤尾	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	
21	国府台遺跡	千葉県市川市	土師器坏	和洋学園校地埋蔵文化財調査室	「葛」墨書
22	須和田遺跡	千葉県市川市	須恵器（レブリカ）	市立市川考古博物館	「博士館」墨書
23	下総国分寺跡	千葉県市川市	須恵器	市立市川考古博物館	「国厨」墨書
24	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	須恵器坏	府中市教育委員会	「国」墨書
25	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	軒丸瓦	府中市教育委員会	
26	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	軒丸瓦	府中市教育委員会	
27	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	軒平瓦	府中市教育委員会	
28	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	三彩陶器小壺	府中市教育委員会	
29	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	三彩陶器小壺	府中市教育委員会	
30	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	三彩陶器小壺	府中市教育委員会	
31	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	三彩陶器小壺	府中市教育委員会	
32	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	緑釉緑彩陶器耳皿	府中市教育委員会	
33	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	緑釉陶器陰刻花文椀皿	府中市教育委員会	
34	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	形象硯	府中市教育委員会	
35	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	鉄製錠前	府中市教育委員会	
36	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	分銅	府中市教育委員会	
37	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	鍍金銅鍔丸鞆	府中市教育委員会	
38	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	銅鍔丸鞆	府中市教育委員会	
39	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	銅鍔丸鞆裏金	府中市教育委員会	
40	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	鉄鉗	府中市教育委員会	
41	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	文字埴	府中市教育委員会	「豊」押印
42	武蔵国府関連遺跡	東京都府中市	文字埴	府中市教育委員会	「足」押印
43	稲荷前A遺跡	神奈川県平塚市	土師器	平塚市教育委員会	「国厨」墨書
44	稲荷前A遺跡	神奈川県平塚市	土師器	平塚市教育委員会	「国厨」墨書
45	高林寺遺跡	神奈川県平塚市	土師器	平塚市教育委員会	「曹司」墨書
46	稲荷前A遺跡	神奈川県平塚市	土師器	平塚市教育委員会	「大住」墨書
47	稲荷前A遺跡	神奈川県平塚市	土師器	平塚市教育委員会	「大住」墨書
48	稲荷前A遺跡	神奈川県平塚市	土師器	平塚市教育委員会	「大住」墨書
49	稲荷前A遺跡	神奈川県平塚市	土師器	平塚市教育委員会	「旧跋一」墨書
50	山王A遺跡	神奈川県平塚市	佐波理匙	平塚市教育委員会	
51	構之内遺跡	神奈川県平塚市	銅印	平塚市教育委員会	「平」
52	六ノ域遺跡	神奈川県平塚市	石鍔巡方	平塚市教育委員会	
53	構之内遺跡	神奈川県平塚市	石鍔丸鞆	平塚市教育委員会	
54	諏訪前A遺跡	神奈川県平塚市	銅鍔巡方	平塚市教育委員会	
55	諏訪前A遺跡	神奈川県平塚市	銅鍔鉤尾	平塚市教育委員会	
56	諏訪前A遺跡	神奈川県平塚市	銅鍔丸鞆	平塚市教育委員会	
57	構之内遺跡	神奈川県平塚市	銅鍔丸鞆	平塚市教育委員会	漆付
58	七ノ域遺跡	神奈川県平塚市	鉄製錠前鍵	平塚市教育委員会	
59	神明久保遺跡	神奈川県平塚市	鉄製錠前札金具	平塚市教育委員会	
60	神明久保遺跡	神奈川県平塚市	銅製錠前海老錠	平塚市教育委員会	
61	稲荷前B遺跡	神奈川県平塚市	銅製錠前	平塚市教育委員会	
62	林B遺跡	神奈川県平塚市	緑釉陶器陰刻花文輪花碗	平塚市教育委員会	
63	構之内遺跡	神奈川県平塚市	緑釉陶器耳皿	平塚市教育委員会	
64	六ノ域遺跡	神奈川県平塚市	灰釉陶器輪花段皿	平塚市教育委員会	
65	御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	須恵器蓋	磐田市教育委員会	「豊穀」墨書
66	御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	須恵器坏	磐田市教育委員会	「厨」墨書
67	御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	二彩陶器碗	磐田市教育委員会	
68	御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	銅鍔巡方	磐田市教育委員会	
69	御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	土師器壺	磐田市教育委員会	人面墨書
70	御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	土師器壺	磐田市教育委員会	人面墨書
71	三河国府跡	愛知県豊川市	羊形硯	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
72	三河国府跡	愛知県豊川市	蹄脚円面硯	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
73	三河国府跡	愛知県豊川市	円面硯	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
74	三河国府跡	愛知県豊川市	陶製印	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	「黄□□□」
75	三河国府跡	愛知県豊川市	須恵器盤	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	「国厨」墨書
76	三河国府跡	愛知県豊川市	須恵器盤	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	「国厨」墨書
77	三河国府跡	愛知県豊川市	須恵器盤	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	「国厨」墨書
78	三河国府跡	愛知県豊川市	須恵器盤	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	「国厨」墨書
79	三河国府跡	愛知県豊川市	灰釉碗	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	「介口」墨書
80	三河国府跡	愛知県豊川市	軒丸瓦	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	

番号	遺跡名	所在地	資料名	所蔵（保管）機関	備考
81	三河国府跡	愛知県豊川市	軒丸瓦	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
82	三河国府跡	愛知県豊川市	軒丸瓦	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
83	三河国府跡	愛知県豊川市	軒平瓦	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
84	三河国府跡	愛知県豊川市	軒平瓦	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
85	三河国府跡	愛知県豊川市	軒平瓦	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
86	三河国府跡	愛知県豊川市	緑釉陶器碗	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
87	三河国府跡	愛知県豊川市	緑釉陶器段皿	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
88	三河国府跡	愛知県豊川市	埴	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
89	三河国府跡	愛知県豊川市	埴	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
90	三河国府跡	愛知県豊川市	埴	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
91	三河国府跡	愛知県豊川市	製塩土器	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
92	三河国府跡	愛知県豊川市	製塩土器	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
93	三河国府跡	愛知県豊川市	製塩土器	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
94	三河国府跡	愛知県豊川市	製塩土器	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	
95	尾張国府跡	愛知県稲沢市	銅印	稲沢市教育委員会	「富」
96	尾張国府跡	愛知県稲沢市	銅印	稲沢市教育委員会	「弥富」
97	尾張国府跡	愛知県稲沢市	緑釉陶器	稲沢市教育委員会	
98	尾張国府跡	愛知県稲沢市	緑釉陶器	稲沢市教育委員会	
99	尾張国府跡	愛知県稲沢市	緑釉陶器	稲沢市教育委員会	
100	尾張国府跡	愛知県稲沢市	風字二面硯	稲沢市教育委員会	「國米斤」へら書き
101	尾張国府跡	愛知県稲沢市	灰釉皿	稲沢市教育委員会	「井立」墨書
102	尾張国府跡	愛知県稲沢市	緑釉陶器風字硯	稲沢市教育委員会	
103	尾張国府跡	愛知県稲沢市	白色陶質土器碗	稲沢市教育委員会	稲沢市指定文化財
104	尾張国府跡	愛知県稲沢市	白色陶質土器鉢	稲沢市教育委員会	稲沢市指定文化財
105	尾張国府跡	愛知県稲沢市	銭貨	稲沢市教育委員会	乾元大宝稲沢市指定文化財
106	尾張国府跡	愛知県稲沢市	銭貨	稲沢市教育委員会	乾元大宝稲沢市指定文化財
107	尾張国府跡	愛知県稲沢市	銭貨	稲沢市教育委員会	乾元大宝稲沢市指定文化財
108	尾張国府跡	愛知県稲沢市	銭貨	稲沢市教育委員会	乾元大宝稲沢市指定文化財
109	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	土師器坏	鈴鹿市考古博物館	
110	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	土師器皿	鈴鹿市考古博物館	
111	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	土師器皿	鈴鹿市考古博物館	
112	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	土師器壺	鈴鹿市考古博物館	
113	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	土師器壺	鈴鹿市考古博物館	
114	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	土師器壺	鈴鹿市考古博物館	
115	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器蓋	鈴鹿市考古博物館	
116	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器坏	鈴鹿市考古博物館	
117	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器坏	鈴鹿市考古博物館	「三」押印
118	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器坏	鈴鹿市考古博物館	「手」押印
119	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器坏	鈴鹿市考古博物館	「人」押印
120	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器坏	鈴鹿市考古博物館	「天」押印
121	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器坏	鈴鹿市考古博物館	「□□□□」（判読不能）押印
122	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	須恵器壺	鈴鹿市考古博物館	「宿」押印
123	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	転用硯	鈴鹿市考古博物館	「上」押印
124	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	転用硯	鈴鹿市考古博物館	「中？」押印
125	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	転用硯	鈴鹿市考古博物館	「小」押印
126	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	転用硯	鈴鹿市考古博物館	「人」押印
127	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	軒丸瓦	鈴鹿市考古博物館	「巴」押印
128	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	軒丸瓦	鈴鹿市考古博物館	「守」押印
129	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	軒丸瓦	鈴鹿市考古博物館	「水」押印
130	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	軒平瓦	鈴鹿市考古博物館	「首」押印
131	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	軒平瓦	鈴鹿市考古博物館	「丁（？）」押印
132	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	軒平瓦	鈴鹿市考古博物館	
133	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
134	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
135	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
136	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
137	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
138	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
139	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
140	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
141	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
142	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
143	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
144	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
145	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
146	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
147	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	
148	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	鬼瓦	鈴鹿市考古博物館	
149	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	鬼瓦	鈴鹿市考古博物館	
150	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	鬼瓦	鈴鹿市考古博物館	
151	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	鬼瓦	鈴鹿市考古博物館	
152	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	鬼瓦	鈴鹿市考古博物館	
153	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	鬼瓦	鈴鹿市考古博物館	
154	伊勢国府跡	三重県鈴鹿市	鬼瓦	鈴鹿市考古博物館	
155	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	土師器坏	鈴鹿市考古博物館	
156	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	土師器坏	鈴鹿市考古博物館	
157	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	須恵器蓋	鈴鹿市考古博物館	
158	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	須恵器蓋	鈴鹿市考古博物館	「川」墨書
159	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	須恵器坏	鈴鹿市考古博物館	「四」墨書
160	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	須恵器盤	鈴鹿市考古博物館	「在」墨書

番号	遺跡名	所在地	資料名	所蔵(保管)機関	備考
161	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	円面硯	鈴鹿市考古博物館	
162	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	円面硯	鈴鹿市考古博物館	
163	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	転用硯	鈴鹿市考古博物館	朱墨付着
164	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	灰釉陶器皿	鈴鹿市考古博物館	
165	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	灰釉陶器皿	鈴鹿市考古博物館	「口」墨書
166	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	緑釉陶器	鈴鹿市考古博物館	
167	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	緑釉陶器	鈴鹿市考古博物館	
168	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	緑釉陶器	鈴鹿市考古博物館	
169	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	黒色土器碗	鈴鹿市考古博物館	
170	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	白磁碗	鈴鹿市考古博物館	
171	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	瓦器碗	鈴鹿市考古博物館	
172	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	製塩土器	鈴鹿市考古博物館	
173	三宅神社遺跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	「小」押印
174	天王山西遺跡	三重県鈴鹿市	円面硯	鈴鹿市考古博物館	
175	天王山西遺跡	三重県鈴鹿市	緑釉陶器	鈴鹿市考古博物館	
176	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	土師器坏	鈴鹿市考古博物館	
177	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	土師器坏	鈴鹿市考古博物館	
178	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	土師器壺	鈴鹿市考古博物館	
179	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器蓋	鈴鹿市考古博物館	
180	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器	鈴鹿市考古博物館	「川」墨書
181	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器坏	鈴鹿市考古博物館	
182	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器坏	鈴鹿市考古博物館	
183	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器坏	鈴鹿市考古博物館	
184	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器坏	鈴鹿市考古博物館	
185	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器坏	鈴鹿市考古博物館	
186	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器坏	鈴鹿市考古博物館	
187	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器坏	鈴鹿市考古博物館	
188	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	須惠器鉢	鈴鹿市考古博物館	
189	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	灰釉陶器碗	鈴鹿市考古博物館	
190	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	文字瓦	鈴鹿市考古博物館	「中？」押印
191	梅田遺跡	三重県鈴鹿市	平瓦	鈴鹿市考古博物館	朱付き
192	伊賀国府跡	多気郡明和町	須惠器坏	三重県埋蔵文化財センター	「國厨」墨書
193	伊賀国府跡	多気郡明和町	土師器皿	三重県埋蔵文化財センター	「姉」墨書
194	伊賀国府跡	多気郡明和町	須惠器鉢	三重県埋蔵文化財センター	
195	伊賀国府跡	多気郡明和町	緑釉陶器皿	三重県埋蔵文化財センター	
196	伊賀国府跡	多気郡明和町	須惠器双耳壺	三重県埋蔵文化財センター	
197	伊賀国府跡	多気郡明和町	須惠器双耳壺	三重県埋蔵文化財センター	
198	伊賀国府跡	多気郡明和町	黒色土器坏	三重県埋蔵文化財センター	
199	伊賀国府跡	多気郡明和町	灰釉陶器皿	三重県埋蔵文化財センター	
200	伊賀国府跡	多気郡明和町	灰釉陶器皿	三重県埋蔵文化財センター	「目口」墨書
201	伊賀国府跡	多気郡明和町	緑釉陶器唾壺	三重県埋蔵文化財センター	
202	伊賀国府跡	多気郡明和町	円面硯	三重県埋蔵文化財センター	
203	伊賀国府跡	多気郡明和町	円面硯	三重県埋蔵文化財センター	
204	伊賀国府跡	多気郡明和町	黒色土器風字硯	三重県埋蔵文化財センター	
205	伊賀国府跡	多気郡明和町	転用硯	三重県埋蔵文化財センター	
206	伊賀国府跡	多気郡明和町	転用硯	三重県埋蔵文化財センター	
207	惣山遺跡	滋賀県大津市	軒丸瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	
208	惣山遺跡	滋賀県大津市	軒丸瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	
209	惣山遺跡	滋賀県大津市	軒丸瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	
210	惣山遺跡	滋賀県大津市	軒平瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	
211	惣山遺跡	滋賀県大津市	軒平瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	
212	惣山遺跡	滋賀県大津市	軒平瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	
213	惣山遺跡	滋賀県大津市	文字瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	「修」押印
214	惣山遺跡	滋賀県大津市	文字瓦	大津市埋蔵文化財調査センター	「修」押印
215	近江国府跡	滋賀県大津市	鬼瓦	滋賀県教育委員会(大津市歴史博物館)	
216	近江国府跡	滋賀県大津市	軒丸瓦	滋賀県教育委員会(大津市歴史博物館)	
217	近江国府跡	滋賀県大津市	軒丸瓦	滋賀県教育委員会(大津市歴史博物館)	
218	近江国府跡	滋賀県大津市	軒丸瓦	滋賀県教育委員会(大津市歴史博物館)	
219	近江国府跡	滋賀県大津市	軒平瓦	滋賀県教育委員会(大津市歴史博物館)	
220	近江国府跡	滋賀県大津市	軒平瓦	滋賀県教育委員会(大津市歴史博物館)	
221	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	軒平瓦	タリビアセンター	不破関軒平瓦第Ⅰ型式
222	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	須惠器坏	タリビアセンター	「駿河万呂」墨書
223	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	灰釉陶器碗	タリビアセンター	「飯」墨書
224	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	円面硯	タリビアセンター	
225	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	須惠器皿	タリビアセンター	「厨」墨書
226	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	転用硯	タリビアセンター	朱墨付
227	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	須惠器	タリビアセンター	「府」墨書
228	美濃国府跡	岐阜県不破郡垂井町	緑釉陶器碗	タリビアセンター	
229	下野国庁跡	栃木県栃木市	軒丸瓦	栃木市教育委員会	
230	下野国庁跡	栃木県栃木市	軒平瓦	栃木県教育委員会(しもつけ風土記の丘資料館)	
231	下野国庁跡	栃木県栃木市	須惠器	栃木県教育委員会(栃木県立博物館)	「國厨」墨書
232	下野国庁跡	栃木県栃木市	須惠器	栃木県教育委員会(栃木県立博物館)	「介」墨書
233	下野国庁跡	栃木県栃木市	須惠器	栃木県教育委員会(しもつけ風土記の丘資料館)	「國府水」墨書
234	下野国庁跡	栃木県栃木市	緑釉陶器碗	栃木県教育委員会(栃木県立博物館)	
235	下野国庁跡	栃木県栃木市	円面硯	栃木県教育委員会(栃木県立博物館)	
236	下野国庁跡	栃木県栃木市	円面硯	栃木県教育委員会(栃木県立博物館)	
237	下野国庁跡	栃木県栃木市	木簡(レプリカ)	栃木県立博物館	
238	下野国庁跡	栃木県栃木市	木簡(レプリカ)	栃木県立博物館	
239	下野国庁跡	栃木県栃木市	漆紙文書(レプリカ)	栃木県立博物館	

時代	和暦	西暦	伊勢国関連の出来事	中央の出来事	
飛鳥	天智 七年	668		近江令制定	
	天智 八年	669		庚午年籍作成	
	天武 元年	672	壬申の乱	飛鳥浄御原宮遷都	
	持統 三年	689		飛鳥浄御原令施行	
	持統 四年	690		庚寅年籍作成	
	持統 六年	692	持統天皇伊勢行幸		
	持統 八年	694		藤原宮遷都	
	大宝 元年	701		大宝律令制定	
	大宝 二年	702	持統上皇三河行幸		
	和銅 元年	708		和同開珎発行	
奈良	和銅 三年	710		平城京遷都	
	和銅 六年	713	伊勢国大風		
	養老 二年	718		養老律令撰定開始	
	天平 元年	729		長屋王の変	
	天平一二年	740	聖武天皇伊勢行幸。赤坂頓宮に滞在	藤原広嗣挙兵。	
	天平一三年	741		恭仁京遷都。国分寺建立の詔	
	※このころ鈴鹿市広瀬町に国府造営着手か				
	天平一六年	744		難波宮遷都	
	天平一七年	745		紫香楽宮遷都。平城京遷都	
	天平二一年	749	昇叙すべき者として伊勢大鹿首があげられる		
	天平勝宝四年	752		東大寺盧舎那大仏開眼会	
	天平勝宝八歳	756		聖武太上天皇崩御	
	天平宝字元年	757		養老律令施行	
	天平宝字六年	762	伊勢国飢饉		
	天平宝字七年	763	石川名足を伊勢守に任ず		
天平宝字八年	764		藤原仲麻呂挙兵。孝謙重祚		
天平神護二年	766	伊勢・美濃で官舎風損			
宝亀 元年	770		道鏡下野国に左遷		
宝亀 六年	775	伊勢・美濃・尾張で異常風雨	大祓おこなう		
宝亀 七年	776	大伴家持を伊勢守に任ず			
宝亀一一年	780	石川名足を伊勢守に任ず。伊勢国内の人民浮浪			
平安	延暦 三年	784		長岡京遷都	
	延暦 八年	789	伊勢国飢饉		
	延暦一三年	794		平安京遷都	
	大同 四年	809	志摩国僧尼伊勢安置		
	※このころ鈴鹿市広瀬町の国府が廃絶・移転か				
江戸	貞観 三年	861	伊勢国司・郡司らによる課丁隠匿		
	貞観一六年	874	伊勢国大風暴雨で国府官舎倒壊		
現代	享保一七年	1732	長者伝説に関する記録の初見		
	宝暦一三年	1763	長者屋敷遺跡に関する記録の初見		
	昭和三二年	1957	故藤岡謙二郎らによる最初の調査		
	平成 四年	1992	鈴鹿市教育委員会による調査開始		
	平成 五年	1993	政庁の確認		
	平成 八年	1996	南野地区の調査		
	平成 九年	1997	長塚地区における倒壊瓦の発見		
	平成一一年	1999	政庁南門の確認		
平成一二年	2000	西院の確認			
平成一四年	2002	国史跡に指定			

参考文献

- 明石新 1999 「国府は移転したかー相模国」『幻の国府を掘るー東国の歩みから』雄山閣
- 明石新 2002 「相模国府の研究」『神奈川県立歴史博物館総合研究報告：総合研究ーさがみの国と都の文化交流』神奈川県立歴史博物館
- 石岡市教育委員会 2001 『常陸国衙跡ー石岡小学校温水プール建設事業に伴う調査ー』
- 磐田市教育委員会 1994 『御殿・二之宮遺跡ー第8次発掘調査のあらましー』
- 磐田市教育委員会 2001 『御殿・二之宮遺跡ー第67次発掘調査報告書ー』
- 江口桂 2001 「古代武蔵国府の具体像を探る」『多摩のあゆみ』（財）たましん地域文化財団
- 大津市 1999 『図説大津の歴史』

木下良 1988 『国府—その変遷を主にして』 教育社歴史新書
木村等 1999 「『幻の国府を掘る—東国の歩みから』 雄山閣
金田章裕 1995 「国府の形態と構造について」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 63 集
桑原滋郎 1984 『日本の美術No. 213 多賀城跡』 至文堂
国立歴史民俗博物館 1986 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 10 集
駒見和夫 1997 「下総国府の現状と一検討—近年における国府台遺跡の調査から—」 『国府台』 第 7 号和洋女子大学文
化資料館
駒見和夫 1999 「国衙の変遷から国庁を探る—下総国」 『幻の国府を掘る—東国の歩みから』 雄山閣
財団法人更埴市文化振興事業団 1996 『シナノノクニから科野・信濃国へ』
斎宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター 1996 『斎宮・国府・国分寺』
柴原永遠男 1991 『日本の歴史④天平の時代』 集英社
桜ヶ丘ミュージアム 2001 『三河国府展—土に埋もれた古代の役所—』
佐藤宗諄編 1994 『日本の古代国家と城』 新人物往来社
滋賀県教育委員会 1977 『滋賀県文化財調査報告書第 6 冊史跡近江国衙跡発掘調査報告』
滋賀県教育委員会他 2001 『いにしへの近江再発見 Part.3 丘上の叢群・近江国府歴史の十字路口にそびえたつ古代都市—
歴史フォーラム資料集—』
信濃国分寺資料館 2000 『東国の国府—発掘された古代の役所—』
鈴鹿市教育委員会 2001 『天王山西遺跡・三宅神社遺跡・梅田遺跡』
鈴鹿市教育委員会 2001 『伊勢国府跡 3』
鈴鹿市教育委員会 2002 『伊勢国府跡 4』
垂井町教育委員会・三重大学考古学研究室 1996 『美濃国府跡発掘調査報告 I』
垂井町教育委員会・三重大学考古学研究室 1999 『美濃国府跡発掘調査報告 II』
タルイピアセンター 2000 『美濃国府—地下に眠る古代都市』
栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 『古代の役所—しもつけ国府とその周辺』
寺村光晴・早川泉・駒見和夫編 1999 『幻の国府を掘る—東国の歩みから』 雄山閣
豊川市教育委員会 1997 『豊川市内遺跡発掘調査概報 VI』
名古屋市博物館 1994 『発掘された古代』
新田剛 2002 「伊勢国府跡の発掘調査」 『日本歴史』 第 652 号吉川弘文館
日本考古学協会三重県実行委員会 1996 『国府—畿内・七道の様相—』
林弘之 2000 「三河国府跡とその周辺の調査」 『日本歴史』 第 628 号吉川弘文館
平井美典 1989 「近江国庁再考」 『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』 第 2 号
府中市郷土の森博物館 2001 『府中市郷土の森博物館ブックレット 2 古代武蔵国府』
府中市郷土の森博物館 2001 『展示解説シート武蔵国府』
三重県埋蔵文化財センター 1992 『伊賀国府跡（第 4 次）発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター 1996 『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』
宮城県教育委員会 1982 『多賀城跡』
山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房
山中敏史・佐藤興治 1985 『古代日本を発掘する 5 古代の役所』 岩波書店
横浜市歴史博物館 2002 『東へ西へ—律令国家を支えた古代東国の人々』
和洋学園校地埋蔵文化財調査室 1997 『下総国府台 I 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第 1 次調査概報』
和洋学園校地埋蔵文化財調査室 1997 『下総国府台 II 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第 2 次調査概報』

表紙

伊勢国府跡 国庁後殿 国庁西脇殿 国庁南門 軒丸瓦・軒平瓦出土状況

裏表紙

伊勢国府跡軒平瓦（平城宮跡 6719 A 同範）

例言

1. 本書の編集執筆は新田剛が担当しました。
2. 本文中の用語について報告書等とは異なる表現に改めた場合があります。
3. 写真の提供を受けたものについては付記しました。
4. 図の引用にあたっては出典を略記しました。ただし必要に応じて編集者の責任により加工をしたものがあります。
5. 掲載写真のうち提供先の記載がないものは鈴鹿市考古博物館保管のものです。
6. 展示資料は都合により変更する場合があります。

本誌の作成及び展示会の実施にあたり、下記の機関並びに諸氏の御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

(敬称略・順不同)

秋田市教育委員会・石岡市教育委員会・市川考古博物館・稲沢市教育委員会・(財)茨城県教育財団・磐田市教育委員会・大津市教育委員会・大津市埋蔵文化財調査センター・大津市歴史博物館・斎宮歴史博物館・酒田市教育委員会・桜ヶ丘ミュージアム・滋賀県教育委員会・滋賀県埋蔵文化財センター・しもつけ風土記の丘資料館・仙台市教育委員会・多賀城跡調査研究所・多賀城市教育委員会・タルイピアセンター・東北歴史博物館・栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター・栃木県立博物館・栃木市教育委員会・豊川市教育委員会・長野県立歴史館・平塚市教育委員会・平塚市博物館・府中市教育委員会・(財)府中市文化振興事業団府中市郷土の森博物館・三重県埋蔵文化財センター・八幡町教育委員会・ロックスプロ・和洋学園校地埋蔵文化財調査室・和洋女子大学文化資料館・明石新・泉雄二・宇河雅之・江口桂・及川宏幸・大上直樹・大場範久・大村至広・大橋泰夫・鏑木理広・川越俊一・川畑由紀子・木村友則・木村等・木村弘之・栗山雄揮・駒見和夫・坂井秀弥・篠原祐一・高瀬要一・竹内英昭・田中久雄・中川尚子・八賀晋・早川万年・林原利明・林弘之・平井美典・平松弘孝・深澤靖幸・北條献示・前田清彦・松浦俊和・松原睦裕・松本太郎・箕輪健一・村山邦彦・山澤義貴・山路直充・山中章・山中敏史・吉水康夫・綿田弘実・和田光生・渡辺寛

発掘された国府

—東海道・東山道の国府を掘る—

発行日：2002年10月2日

編集発行：鈴鹿市考古博物館

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地

Phone0593-74-1994 Fax0593-74-0986

kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

<http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

印刷：有限会社中村特殊印刷工業



鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 鈴鹿市国分町224番地 Phone 0593-74-1994 Fax 0593-74-0986

kohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

<http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>